

# 初心妻志願奴隷

ライトSMすら未経験の娘（25歳）が生涯の服従を  
1日24時間1年365日の調教と折檻を乞い願う



濠門長恭

## 前書き

これは作者の実体験を織り込んでいるかもしれないフィクションです。あえて、フィクションとまでは言いません。願望とか妄想は、いつもどおり存分に盛り込んでいます。作品の舞台は、インターネットが普及し始めた初期、二十世紀末に設定しています。実は筆者の婚活がこの当時でしたので。

ただし、筆者の年齢と主人公の年齢は、もちろん一致していません。

付け加えるなら、筆者には離婚歴はありません（結婚歴については、ヒ・ミ・ツ）。まとめ買いしたボロ株が大化けして、調教部屋付の邸宅を即金で買った経験もありません（とほほ……）。

目次

前書き ..... 2

1章 隷従志願 ..... 5

SM 未経験の女 ..... 11

最初の調教 ..... 22

アナルバージン ..... 42

薔薇色の未来設計 ..... 61

2章 苛酷な躰け ..... 65

露出ファッション ..... 65

観光バス晒し ..... 86

苛酷な躰け ..... 114

3章 主人の義務

カップル狩り

信頼と尊敬

折檻部屋

永久脱毛

4章 縄の苛燭

艶やかなドレスの裏側

キャンドルサービス

思いつきの露出服

5章 新婚露出旅行

嵐の前の静けさ

苛烈な褒美

女性虐待容疑

狂言の尋問

生涯の伴侶

6章 義母調教

マゾ牝奴隷の日常

見果てぬ夢

後書き

# 1章 隸従志願

名 前…柴田章夫  
年 齢…三十八歳  
家 族…両親（別居）、兄弟無し  
結 婚 歴…シングルアゲイン（生別）  
職 業…会社員（管理職）  
年 収…八百万円  
資 産…マイホーム資金あり  
身 長…百七十センチ  
体 重…六十八キロ  
血 液 型…B  
希望条件…三十歳以下、再婚可（子供不可）  
趣 味…パソコン、映画鑑賞

自己紹介…仲睦まじい夫婦として幸せな家庭を築き、良き両親として子供を育てていくことも大切ですが、なによりも成熟した男女としてタブーにとらわれない愛情生活を持ちたいと考えています。ときには厳しく辛く感じることもあるでしょうが、僕を信じてついてきてください。

二年前に結婚仲介サークルに加入したとき、自己紹介メッセージには苦心した（年齢は自動更新だから、今現在で三十八歳）。

「S九十パーセント。Mプレイも経験しているから、責めの限度は心得ているつもりです。プレイよりは調教、調教よりは拷問の好きなハード指向のサディストです」では、登録してもらえない。こういった曖昧な表現で我慢するしかなかった。それでも、マゾ願望を持った女性には、最低限のニュアンスは伝わると思う。

あるいは私の予想以上に、データを見た女性は私の性癖を見抜いたのかもしれない。この二年間でお見合いにまでこぎつけたのは三人だけだった。三人が三人とも、私の自己紹介メッセージを正しく理解していたのだが、結婚を前提とした交際を始める意思はなく、興味本位で会ってみようというだけのことだった。

自称マゾ女とは、何人もSM同好会や出会い系サイトでプレイした。インターネットの掲示板で知り合った相手もいる。しかし彼女たちは、結婚生活に（すくなくとも本格的な）SMは持ち込みたくないと考えているらしかった。だいいち、SMをSEXの前戯くらいにしか考えていない女がほとんどだ。縛りはいいけど鞭打ちは絶対に嫌だとか、彼氏にばれるから剃毛は不可とか、アナルSEXは痛いだけだから駄目とか、やたらと注文が多い。サディストの男性に一切を支配されたい、マゾ妻になりたい、あるいはマゾ牝奴隷として飼われたいと本気で望んでいる女も皆無ではない。だが、私の巡り会ったそういう女たちは、とつくの昔に誰かの所有物になっていた。

たいていの女性はマゾ願望を潜在的に持っているという。あせらずにじっくり仕込んでいけば、マゾ女に調教できるのかもしれない。だが私は、最初の妻でそれに失敗している。それに——軽く縛られて犯されてみたいとか、恥ずかしい格好を強制されたいといった程度ならともかく、全身を鞭痕で埋め尽くされたいなどという願望は、やはり病的なものだと思う。ノーマルで精神的に健康な女性を、そういうふうには調教する自信は、私にはない。

中途半端なSMプレイならSM同好会で間に合っているし、そういった風俗店もいく

らだつてある。出会い系サイトでSMプレイに興味を示した素人娘を手加減なしで責め抜いても、百万円にも満たない現金で後腐れはなくなる。けれど私は、どちらにも満足できない。制約を課せられたプレイには、もう飽きている。そして……本気でいやがり泣き叫ぶ女を責めるのは、実は好みではない。

そういう訳で、かすかな本当にかすかな望みを結婚サークルに託した。年会費の二十万円が無駄になるだろうことは覚悟していた。

だから。帰宅して、サークルからの見慣れた封筒を郵便受けに見つけても、ほとんど期待はしなかった。パソコンのスイッチを入れてから、無造作に封筒を開けた。

(おや……?)

紹介データの用紙だけでなく、写真が同封されていた。このサークルは月に二回、コンピュータが無作為に選んだ相手を二人ずつ紹介してくれる。この段階では顔写真は無論、本名や住所も伏せられている。データを見て気に入れば交際希望の返事を出し、それから相手に連絡が行き、OKが出てから個人情報を送られてくるという、複雑な仕組みになっている。最初から写真が同封されているのだから、これは通常の紹介データではない。



果たして、データ用紙の冒頭に「貴方のデータを見た女性から交際希望の申出がありました」と印字されていた。期待が一気に高まる。

写真を見て、期待に不審が入り混じる。写っている女性は、二十歳をそんなに過ぎていないように見える。平均的な女性が自分で望むよりはちよつとだけぽっちりした抱き心地の良さそうな身体、ぽっちりした目と小振りだが肉感的な唇、そして私好みのロングヘア。

こんなに年齢の不釣りな女性が、わざわざ交際希望を申し込んでくるというのは――やはり、私の自己紹介メッセージを理解したからだとしか考えられない。また冷やかしなのか、それとも……  
はやる気持ちをおさえて、データに目を通す。

名 前…山辺昌美

年 齢…二十五歳

家 族…母（父死別）、兄弟無し

結 婚 歴…初婚

職 業…家業手伝（ブティック）

年 収…不定

資 産…特に無し

身 長…百五十六センチ

体 重…五十一キロ

血液型…A

希望条件…私を理解してくださる方

趣 味…読書、音楽鑑賞、スイミング教室

自己紹介…幼いうちに父を亡くし、母に甘やかされて育ちました。こんな私を心身ともに厳しく躰け直してくださる逞しい男性にお仕えしたいと願っています。

これは……まさしく、マゾ願望ではないのか。「心身ともに厳しく躰け」てほしいというのは、ハードな調教を意識しているに違いない。「お仕えしたい」という古風な表現は、ずばり隷従を意味しているのではないか。

歓喜の爆発。胸が苦しくて、息もできないほどだった。ようやく立ち上がったパソコ

ンがインターネットに接続して電子メールの到着を告げていたが、それどころではない。服を着替えるのも後回しにして私は受話器を取り上げ、個人情報欄に記されている番号をプッシュした。

## S M 未経験の女

そして、土曜日。私はシティホテルのロビーで、山辺昌美を待っていた。いちおうはお見合いだから、スーツなど着込んでいる。そして、ノートパソコンのキャリングバッグ。見かけより収納スペースが広いので、縄と鞭の他にもいろいろ小道具を詰め込めるし、フォーマルな服装でも違和感がない。

電話では今日の待ち合わせを約束しただけで、具体的な話はなにもしていない。こんな物を持ってきても、まったくの無駄足に終わるかもしれない。いや、彼女が期待どおりの人種だとしても、初対面でいきなりプレイという展開には、まずならないだろう。マゾ願望が強ければ強いほど、不安も大きい。見ず知らずの男性に虐められたいと空想することはあっても、実際にはじゅうぶんな相互理解と信頼がなければS Mプレイは成

立しない。ノーマルな男女がお見合いの席で意気投合して、そのままホテルへ直行するのとは訳が違う。それでも、もしもということがある。ちらっと見せて、私が本気で本物だと示すくらいのはするかもしれない。それとも、逆効果だろうか。

そんなことを考えているうちに、だんだん不安がつのつてくる。彼女の自己紹介メッセージに深い意味はないのかもしれない。ちよつとファザコンが強いだけかもしれない。十三歳も年上の男性を結婚の対象として考えるくらいだ。いや……ファザコンだけにしても、ふつうの女よりは調教しやすいはずだ。不安が、また期待に傾いたりする。

腕時計を見る。午後二時ちょうど。写真の顔を探してロビーをぐるりと見回し、エントランスに目をやる。淡いグリーンのスーツを着た女性が、はいつてくるところだった。彼女だ。

昌美は落ち着かない様子で、あちこちに視線を向けている。私を見ても、気づかないようだった。

私は立ち上がって、正面から昌美に近づいた。

「山辺昌美さん？ 柴田です、初めまして」

昌美は固い表情で会釈した。

「はい、そうです。よろしくお願いします」

緊張しているのがありありとわかった。初めてのお見合いでも、これほど緊張する娘は少ないと思う。ふつうのお見合いではないと、彼女も意識しているのだろうか。

私は予定を変更した。

「ラウンジへ行きませんか。今ならすいているし、ゆっくりできます」

彼女の返事を待たずに、先に立って歩き出す。昌美は黙って私についてきた。馬鹿げているとは思うが——たったこれだけのことから、彼女は男に従うタイプではないかと心中で推測してみたりする。

エレベーターで最上階へ上がる。ラウンジとは言ったが、実際にはスカイレストランのカクテルコーナーへ昌美を案内した。予想していたとおりに、客はほとんどいない。ウェイターが案内してくれたのは展望窓に面した席だった。窓を横に、テーブルを挟んで座る。

「陽の沈まないうちからお酒というのは抵抗があるかもしれませんが、緊張をほぐしなくて。つきあってくれますね」

それだけは断わっておいて、彼女の好みも聞かずに注文する。

「バーボンをダブルで。銘柄はおまかせします。こちらにはメロンダイキリを」

ウェイターが立ち去ってから、あらためて自己紹介。といっても、お見合いの席で話題にするような事柄は、事前に紹介データで知っている。

「こんなことを聞いては失礼かもしれませんが——これまで、サークルの仲介でお見合いをされたことは？」

とくに意図があつたわけではない。趣味とか世間話とか、つまらない方向へ話を流しなくなつたので、きいてみただけだった。だが、彼女の返答は予想外だった。

「初めてなんです。先月入会したばかりです。データをを見せていただいて、柴田さんから、わたしのことを理解していただけるかなと思いましたが」

女性会員は月二回の紹介だけでなく、登録されているデータを何人分でも閲覧できる。とすれば、彼女は——数多くの男性の中から、とくに私を選んだということになる。

「それでは……」

言いかけたとき、ウェイターがテーブルの横に立った。昌美の前には、彼女のスーツと同じ色のカクテルが置かれた。

「それでは、乾杯しましょうか。ふたりの出会いに。そして、お互いに理解し合えるよ

うに」

グラスを持ち上げて軽く傾ける。

「そんなに強いお酒ではありませんよ」

すすめながら、私はストレートのウキスキーをワンショット分ほども口に含んだ。

昌美は緑色のカクテルをしばらく眺めていた。私は辛抱強く待つ。やがて昌美はカクテルグラスを手に持って唇に近づけ——ほとんど一気に中身をあげた。

「おいしい」

グラスをテーブルに置いたとき、昌美の頬は薄く染まっていた。

「いつもは、ほとんど飲まないんですけど」

恥ずかしそうに昌美が言った。

「わたしも緊張してるんだと思います。もう酔っ払ったみたい」

極端にアルコールに弱い体質だとしても早すぎる。女は自分の都合で酔うことができない。多分、それだろう。

そうであるなら、私は彼女の期待にこたえてやらなければならない。だが、本当にそうなのか？ 私の一方的な勘違いということはないだろうか？

「ぼくの自己紹介メッセージは、読んでいただけましたか？」

思い切ってたずねた。真剣を大上段に振りかぶった心境だった。だが、まだ斬り込んだわけではない。相手の出方次第では剣を引くこともできる。

一瞬、昌美は私を見上げて、すぐに目を伏せた。

「……はい」

囁くような返事だった。彼女はメッセージに隠された意味を理解している。私は確信した。そうでなければ、目を伏せる理由がない。

どうしようか。私は、まだ迷っていた。ごくふつうにデートを重ね、頃合を見計らってベッドに誘い、徐々に目隠しとか浴衣の紐での縛りとかで反応をたしかめて——というのが手順というものだろう。しかし、明白な被虐願望を持った女性は、それをまだるっこしく感じるかもしれない。それに……前の妻で失敗した手順を繰り返すのも業腹だった。

駄目なら、それでもいい。私は、大上段に構えた剣をまっすぐに振り下ろす決心を固めた。

「厳しく躰け直してほしいという、あなたのメッセージは読みました。ぼくは躰けに縋



と鞭を使いますよ。それでもいいんですか？」  
ひと息に言つて、グラスを空けた。

数十秒の沈黙。それとも、数分だったか。

「……はい」

昌美は目を伏せたまま小さな声で、しかしはつきりと答えた。

理解してもらえらるだろうか、私の内心の狂乱歓喜を。前妻の慰謝料に財産のほとんどを取られた後、ほとんど自棄になつて買った五万株が半年で二十円から五百円にまで大化けしたときでさえも、これほどに大きな純粋な感動はなかつた。

しかし、呆然としている場合ではない。この瞬間から、私は昌美に対してサディストの支配者として君臨しなければならぬのだ。彼女がそれを望んでいることを、今や私はまったく疑わなくなつていた。だが、彼女はどの程度のことを望んでいるのか。

「これまで、そういった躰けを受けた経験は？」

私は口調をあらためて、昌美を尋問した。

「ありません」

それが恥ずべきことでもあるかのように、ますます小さな声になる昌美。

「つきあっていた男性にお願いしたことはありません。でも……嫌われてしまいました」  
昌美は辛そうに告白した。私は同情の言葉などかけない。無言でいることで、先をうながす。

「これまで、お見合いはずっとお断わりしてきました。お世話をしてくださった方から母の耳にはいるかもしれないと思うと、こういったお願いをする勇気がありませんでした。それで、この会に入会しました。そうしたら、いきなり柴田さんに巡り会えたんです」

つまり、私は希有の幸運に恵まれたわけだ。SM同好会にフリーの真性M女が初めて参加して、そのまま私の専属奴隷になったようなものだ。思い切ったメッセージを載せた私に、幸運の女神がほほ笑んでくれたのだ。

私は満足だった。幸せだった。と同時に、すさまじいまでの飢渴を意識するようになった。一日でも早く、この女を素裸に剥いて縄を掛け鞭打って犯してやりたかった。初心者だから、あまりハードな責めはできないかもしれない。だが、昌美の被虐への渴仰もすさまじい。そうでなければ、初対面の私にこんな告白をするはずがない。彼女にとっても、私との出会いは千載一遇のチャンスだったのだ。

「やつと……ぼくは、自分を理解してくれる女性に巡り会った。それは、きみも同じ思  
いだろう。だが、ひとつだけ確認しておきたいことがある」

私は慎重に言葉を選びながら、最後の質問をした。

昌美は顔を上げた。会ったとき以上に緊張した面持ちだった。これほどの重大な告白  
をした後で、なにをきこうというのですか。彼女の表情は、そう語っていた。

「ぼくはサデイストだし、経験もじゅうぶんにあるつもりだ。けれど、結婚となると：  
：三百六十五日、二十四時間、ともに生活することになる。そのうちの何割かは——と  
いうか、夫婦の営みの時間以外は、とすべきか。きみは夫に愛される妻、家計を切り  
盛りする主婦として暮らしたいのかな。それとも……」

「そんなの、おかしいです」

昌美が強い口調でさえぎった。

「そんな使い分け、わたしにはできません。どんなときでも、きちんと躡けていただき  
たいんです。それが……ほんとうの躡けだと思えます」

ひどく重たい荷物を肩に乗せられた気分だった。そのシチュエーションをこそ、私も  
夢想していた。だが、それが私にとってどんなに疲れる状況であるかを理解できるだけ

の分別はつく年齢になっていた。

しかし、そんなことを昌美に説明する必要はない。生涯に二度とは訪れないだろう僥倖を目の前にして、わずかでもそれを逸する言動などできるはずがなかった。私は、昌美が望むがままの支配者になる。

「いい覚悟だ。お前の望みどおり、これからはどんなときでも厳しく躰けてやる。経験がないからといって、手加減したりはしない。泣こうが悲鳴をあげようが失神しようが、必要な躰けはお前の身体に叩き込んでやる」

そこで言葉を切って、煙草を取り出す。

「と言っても、そんなに無茶はしないよ。限界の見極めがつくまではキイワードを決めておくしね」

「キイワード……？」

「そう。原則として、お仕置きするときにはきみの訴えは無視する。だが、『辛いです』と言ったときには手加減するとか。『お赦してください』と言えば即座に中止。そういう約束を前もって決めておくんだ」

「それも、おかしいと思います」

昌美は私の言葉にさからった。

「赦してほしいと言ったら赦してもらるなんて、そんなの、お仕置きじゃないです。わたしを甘やかさないでください」

初心者の怖さというべきか。昌美は自分を追い込むようなことを言う。そして、まず私の負担を増やしてくれる。

いいだろう。自分がどれほど苛酷な仕打ちを望んでいるのか、実際に教えてやろう。私は、そう決心した。これほど思い詰めているのだから、なにもしないで帰したりしたら、かえって失望させることになる。

私は黙って煙草に火をつけた。昌美は不安そうな眼差しで、私の挙動を見守っている。千載一遇のチャンスを逸したくないと渴望しているのは、彼女も同じなのではないか。

「お前の願いは、よくわかった」

私は、昌美に対してこの先ずつと使うだろう言葉遣いを模索しながら口を開いた。

「俺としても、厳しい折檻を悦んで受け入れる従順な妻を望んでいる。しかし問題は、お前が果たして俺の妻にふさわしい女かどうかということだ。口ではなんとでも言えるが、実際のところはどうかかな？」

昌美は怯えたように目を伏せた。今度は反論しない。そのかわり、頬に薄く差していたピンク色が濃さを増して顔全体に広がっていった。そうか。わかっているんだな、期待しているのだな。私は心の中でつぶやいた。昌美に対してというよりは、私自身を励ますために。

「お前が俺の妻にふさわしい女かどうか、これから調べてやる。ついて来い」

私は伝票をつかんで立った。その場限りのプレイと割り切って会った女性に対しても、こんなに一方的な態度をとったことはなかった。だが、昌美の場合は——彼女が、こういう扱われ方を望んでいる。今や私は、そう確信していた。

昌美は素直に立ち上がり、私についてきた。

### 最初の調教

シティホテルを出て繁華街を歩き、近くのアッシオンホテルへ行った。何度か利用したことのあるところだった。SM専用ルームはないが、部屋のまん中に意味もなく柱が立っていたり天井の梁がわざと剥き出しになっている広い部屋がある。

エレベーターの中で、昌美の膝がかすかに震えているのに気づいた。ほんとうのところは、私だって似たような心境だ。

私はさっさと部屋へはいると、奥にある椅子のひとつを部屋の中央に向け直して座った。昌美は入口を上がったところでしゃがんで、脱ぎ散らかした私の靴まで揃えた。ふつうに使う意味で、きちんと躰けを受けた女性だと、私は感心した。こういう女は、SEXの欲望を抑制しているのではないだろうか。マゾ願望を表に出すことなど考えられず——だからこそ、抑圧が限界に達したときには思い切った行動に出るのかもしれない。昌美は部屋にはいつてきて、私の凝視を受けて立ちすくんだ。私ひとりが向きを変えた椅子に座っていて、彼女の座るべき場所はない。

「お前が俺の妻にふさわしいかどうか。まずは身体検査だ。そこで素っ裸になれ」  
絶対的支配者としての最初の命令を、私は昌美に与えた。

実はこれが私の常用パターンだった。全裸の身体検査から道具検査。適当な理由を見つけて緊縛。拷問で罪を認めさせて懲罰の鞭打ち。受刑の態度が良ければご褒美に抱いてやり、反省の色が見えなければ犯す。

だから余裕たっぷり——のはずなのに、私の声はうわずっていた。しかし、極度の緊

張状態にある昌美は、私の異常なまでの興奮には気づかなかつただろう。

昌美は両手でスーツをしっかりと押さえて、私を見ている。

「素っ裸になれと言ったのが聞こえなかつたのか？」

昌美はしばらく動かなかつた。本当の意味でためらっているのではないと、私は直感した。昌美のマゾとしての願望（あるいは美意識といつてもいい）では、衣服は自分で脱ぐものではなくサディストに引き裂かれるべきものなのだろう。

たとえば、麻雀を考えてみよう。自分と同格以上の相手は、なかなか読めない。ところが初心者の手の内は、不思議なほど見通せるものだ。五索を切つてリーチの場合でも捨て牌の様相から六九索の一点、絶対に一四索はないとまで読める。ところが格上相手だと、筋の二八索も危なそうだし、くつつき聴牌で万子のほうが危険に見えたりする。

そう——今の私は、昌美の心理をかなり正確に読み取っている自信があつた。だからこそ、昌美を力づくで裸にするような真似はしない。みずからの意思で御主人様に素っ裸を晒す恥ずかしさを、たっぷり教え込んでやる。

やがて、昌美は両手を動かし始めた。ボタンを外して上衣を脱ぎ、そばのベッドに置いた。小さなリボンをあしらつた純白のブラジャーがあらわになる。膝丈のスカートが



床に落ち、パンティストッキングと、その下のショーツが現われる。

「ごちやごちや着込んでいるな。今後は一切の下着を禁止する。そのつもりでいろ」

昌美は、ちらっと私を見た。私は厳しい目で見つめ返す。昌美は諦めたように目を伏せて、下着に手をかけた。

昌美はブラジャーを取り、パンティストッキングとショーツを一緒に脱いだ。両手で胸と腰を隠してうつむく。

「そんな姿勢では身体検査ができないだろう。両手を頭の後ろで組め」

昌美は、また私を見た。今度は視線が合う前に目を伏せて、命じられたとおりの姿勢をとった。顔だけでなく、全身がピンク色に染まっていた。

「頭を上げて、肘を張って胸をそらせ。両脚を広げて、腰を前に突き出せ」

昌美は私の命令に従順だった。全裸になって、覚悟を決めたようだった。

昌美にすべてを晒け出させておきながら、私はまだスーツを着たままだった。おもむろに上着だけを脱いだ。女は裸身で男は着衣。男の側の圧倒的な優位を象徴している。そして私のズボンは——まだ平穏な形状のままだった。

女を責めるとき、胸のあたりには興奮がこみあげてくるのだが、私の股間はなかなか

戦闘態勢に突入しない。どうやって料理しようか。どうやって、この女を哭かせてやるか。と、醒めた目でシナリオを考えているのだ。

とりあえず昌美の正面に立って、じっくり裸身を観察する。水泳でシェイプアップした肉体は、適度に脂肪と筋肉が乗っていた。極端な巨乳や絶壁は私の好みではないのだが、その点も申し分なかった。じゆうぶんにくびれた腰と、引き締まった尻。陰毛は薄いので、タワシ洗いには向いていない。だが、別のいたぶり方がある。

「縛り甲斐のある身体をしているな」  
手を伸ばして、乳房を軽く握った。

「いやっ！」

昌美は身をよじって逃れようとした。

「じっとしている！」

厳しく叱りつけて、私は乳房をつかむ指に力をこめた。

「痛い……」

昌美は両手で私の手首をつかみ、引き剥がそうとする。

「誰が姿勢を崩していいと言った」

「……………」

昌美は顔をそむけて両手を突っ張る。私も本気になって乳房を絞りあげた。

「く…………くう…………」

苦痛に呻きながらも、昌美は抵抗をつづける。私は左手の甲を昌美の頬に叩きつけた。

「きゃあ！」

昌美は反射的に私の手首をはなして、両手で顔をかばった。

「俺を本気で怒らせるつもりか。さっさと手を頭の後ろで組め」

昌美は恨めしげに私を見上げたが、今度は命令に従った。

「バストは幾つだ？」

乳房の重みをはかるように揺さぶりながら尋問を始める。

「八十三のCカップです」

急に素直になった。きかれていないことまで答える。

「ウエスト」

「五十四です」

「ヒップ」

「……八十五」

尋問しながらウエストのくびれを両手でたしかめ、ヒップを撫で上げる。

「百五十六センチ、五十一キロというのは、間違いないのか？」

「はい。ずっと変わっていません」

「そんなに悪くない数字だ。ボディは合格にしてやってもいいな。だが……肝心の道具は、どうかかな」

右手を股間にあてがい、直角に立てた中指で割れ目を抉ってやった。

「いやっ！」

昌美は股間を押さえて飛びすさった。いちいち過剰な反応をする女だ。これまでプレイした女は、援助交際で捕まえた初心者でも身体検査くらいには動じなかった。昌美の反応のほうが正常かとも思ったが、どこか演技くさい。

「お前は基本的な躰けもできていないんだな」

私は昌美の反応をうかがいながら、テーブルに置いたバッグを開けた。ぎっしり詰め込んだ縄束に、昌美の視線が吸い寄せられる。

何年も使い込んだ麻縄だ。ほんとうは荒縄が趣味なのだが、長持ちしないしバッグが

藁屑で散らかる。チクチク刺激が強くて、初体験の女を必要以上に怯えさせることもある。かといって綿ロープは柔らかすぎで好みに合わないし、化繊のロープは固くて扱にくい。結局、麻縄がベストだ。

「逃げられないように縛ってやる」

私は縄束を手にして、昌美に近寄った。昌美は両手で胸を抱えて、怯えたように立ちすくんでいる。だが、伏せた目が潤んでいるのを、私は見逃さなかった。

(そういうことだったのか)

命令にわざとさからって厳しく躰けられることを、昌美は望んでいたのだ。

私は無言で昌美の手首をつかみ、背中にねじ上げた。

「あ……」

昌美はかすかに悲鳴をあげた。膝が震えている。しかし昌美の身体は柔らかかった。

手首は肩甲骨のあたりまで容易に上がった。背中に垂れた髪を掻き上げながら二重に折った縄で手首を重ねて縛り、胸の上をひと巻きして背後で絞る。

「くうう……」

驚くほど甘い声で昌美は呻いた。膝が砕けて、床に倒れ込んだ。

「これくらいで音を上げるんじゃない。まだ躑躅は始まってもないんだぞ」

上体を引き起こして、継ぎ足した縄で乳房の下に縄を掛けた。縄尻を腋にくぐらせて上下の縄を絞ると、昌美は激しく喘いだ。目は、すでに宙をさまよっている。

私は縄の掛け方をひと通りは心得ているが、やんわりと縛って女に感じさせるようなテクニクは持ち合わせていない。どころか、容赦ない緊縛で苦痛を与えてしまう。その私に縛られて、昌美は陶醉している。乾ききった砂漠が豪雨を貪欲に吸い込んで、様を、私は連想した。雨雲のほうも、熱した砂から濛々と立ちのぼる熱気に刺激されて、ますます雨足を強める。昌美の喘ぎに反応して、私の股間はズボンの厚い生地を突き上げて聳え立ち脈動していた。

私は昌美に、胡座を組んで座るように命じた。昌美は激しく首を振って拒んだ。本気でいやがっているようだった。だが、生理的に受け入れられなくて拒絶しているという状態には程遠い。

たとえば、私はMプレイでも相当に苛酷な拷問に耐えられる。ペニスに針を刺してやろうかと言われて、本気で赦しを乞うたことがある。ところが、針を近づけられるとますます硬くなってしまうのだから、どうしようもない。だが、黄金に関してだけは、絶

対に駄目だった。急速に被虐願望そのものが萎えてしまい、プレイを続けることができなくなつたほどだ。サディストとしても、黄金化粧を女体に施そうなどとは考えもしない。

昌美にも、そういった限界は必ずあるだろうが、ちよつと恥ずかしい姿勢を自発的にとることくらいで、生理的な嫌悪を感じるはずもない。

私は背後から双つの乳房を、今度は手加減なしに握り潰した。指を食い込ませながら左右にひねり上げた。

「いやあ……痛い！」

「甘やかさないでくれと言つたのは、お前だぞ。命令に従わなければ懲罰が待っていると覚悟しておけ」

昌美は頭をのけぞらせて潤んだ目で私を見上げ、すぐにうなだれた。手の力を緩めてやると、おずおずと脚を開き始める。

昌美が胡座をいやがったわけは、ひと目でわかった。フローリングの床まで、股間から滴り落ちた淫ら汁で濡れていたのだった。

「なんだ、これは。縛られながらイッていたのか。厳しく躡けてほしいなどと、しおら

しいことを言いながら、本性は救いようのないマゾ女だったんだな。いや、獣のように発情したマゾ牝だ」

股間からあふれ出た汗を指で搦って、鼻先になすりつけてやった。指で唇をこじ開けると、荒い息を吐きながら舌を絡ませてきた。他の物もしゃぶらせてやろうかと思ったが、それは後の楽しみに残しておいて緊縛を続ける。

胡座の脚をさらに引き上げて足の甲を太腿に乗せ、結跏趺坐を組ませる。身体の硬い私だと、これだけでも相当な苦痛なのだが、昌美は平気なようだった。いや、羞恥に苛まれて小さな声で喘ぎ続けている。それを無視して脚の交差した部分を縄で縛り、首に掛けて引き絞って、上体を四十五度まで傾ける。

肩を支えながら押し倒して床につけてやると、昌美は両脚を開いたまま尻を天井に向けた達磨転がしの姿勢に固定された。

「なにもかも丸見えだぞ」

「いやあ、見ないで……」

昌美は視姦から逃れようともがいたつもりだろうが、尻を悩ましげに振ってますます私の興奮を煽るだけだった。



床に頬をつけて見上げる昌美の目の前で、外科手術用の極薄ゴム手袋を右手に嵌めた。  
「お前の道具を、じっくり検査してやるぞ」

昌美の背後から指を二本、ぬらぬら光っている花芯に突き立てた。

「あん……」

昌美が甘く呻く。と同時に、指がきつく締め付けられた。

「ずいぶん開発されているな。いったい、何本のチ●ポをここへ咥え込んだんだ？」  
指をさらに奥へ進めながら尋問する。

「質問には正直に答えろ！」

二本の指を鉤形に曲げて、尻を吊り上げてやる。

「痛い……三人だけです」

「三人だけ、だと。だけ、とはなんだ。だけ、とは。お前は、三人もの男に穢された身で俺の妻になれると思えば上がったのか」

「……………」

煮えたぎっていた昌美の内部が急速に冷めていくのが、はっきりわかった。初心者の昌美は、今の言葉を真に受けたらしい。逆に言えば、すでに昌美は初対面の私を生涯の

伴侶として心に決めているのだ。それとも、私の一方的な思い入れに過ぎないのだろうか。そんなことを一瞬に考えながら、親指で花卉を蹂躪して昌美の汁にまみれさせる。

「淫乱なお前のことだ。どうせ、こっちも処女じゃないんだろう」

親指をアヌスにあてがって、自白をうながした。

「そこは、まだ……」

男を受け入れたことはないと答えた。

「ほんとうか？ あとで嘘とわかったら、この道具が壊れるまで拷問にかけるぞ」

「ほんとです。あ、でも……」

「でも、なんだ？ やっぱり嘘をついてたんだな」

「違います！ でも……浣腸とか自分の指とかで悪戯したことは……」

「呆れた淫乱マゾ牝だな。だが、いちおうはケツの処女を守ってきたわけだ」

「はい」

「それは、俺に捧げてもらおうぞ」

私はアヌスにあてがった親指をぐっと押しつけた。

「はい……いい、痛い！」

「力を抜け。口を大きく開けて、息を吐くんだ」

昌美の悲鳴を無視して親指を進める。

「はあああ……」

昌美が息を吐き出し終えたとき、親指はするりと奥まで侵入を果たした。親指の根元はきつく締め付けられるが、内部は広い。親指を上下左右に動かすと、ころころした塊に触れた。

「糞がたまっているな。今度からは、ちゃんと出してこい」

言い付けに従ったところで、どうせアナルファックの前には強烈な浣腸を施すのだが。私は右手の指をボーリングの球をつかむときの形に曲げて、昌美をこねくり回した。

「あ……あ、ああ……あああーっ」

甘いソプラノで昌美は鳴いた。残った指でクリトリスを転がしてやり、左手で乳房を揉みしだいた。昌美の鳴き声が急ピッチになっていく。

「イケよ。恥ずかしい格好に縛られて指で虐められて、それでイッてみせろ」

厳しく掛けられた縄にさからって背中を反り返らせ、昌美は絶頂に達した。私は指の動きを緩めながら、たつぷりと余韻を味わわせてやった。

頃合いを見計らって尋問を再開する。

「調教済みのマゾ女も顔負けの乱れっぷりだったな。いったい、どんな体験をしたら、お前みたいなマゾ牝になるんだ」

まだ意識が朦朧としている昌美は、私に問われるままに過去の性体験を告白した。

自分のマゾ願望をはっきりと自覚したのは、●学生の頃だと言った。自縛を試みたが、手をうまく縛れないのがもどかしかったそうだ。全裸になって縄禪をした姿を鏡に写しながらオナニーをするのが好きだが、母親と同居しているので実行できるチャンスはすくない。縄を掛けたまま外出するのは、怖くて一度も実行したことはない。乳首をクリップに咬ませたこともあるが、痛みには耐えられなかったという。

縄禪緊縛散歩だろうと、クリップ責め長時間放置だろうと、お前が望むだけ——いや、望む以上に堪能させてやるとも。私は指の動きを早めて、昌美を二度目の絶頂に向かって駆り立てた。

ロストバージンは短大一年生の夏休みだと言った。相手は海で知り合った大学生だった。そのときにはいちおうの快感があったのだが、ノーマルなSEXは回数を重ねるにしたがって、むしろ感じなくなっただけだ。九月には別れている。短大卒業後は小さな

会社に勤めて、二十一歳のとき先輩の社員に抱かれた。やはり快感はなく、思い切つて性癖を告白したのだが、変態呼ばわりされて相手にされなかった。その噂が広まったので会社を辞めた。三人目は、お見合いで交際を始めた三十歳の会社員だった。三か月の交際を経てベツドインした。同じパターンだった。数回のSEXの後に告白して、翌日には紹介者を通じて断わりの返事がきた。

なんて不器用な女なんだと、私は思う。前戯のバリエーションとして目隠しプレイとか、浴衣の紐で軽く縛ってもらうとか、徐々に男を慣らしていけば違った結果になつていたかもしれないのに。それともSM専用サイトとか、いつそSM同好会を利用する手もあつたはずだ。

と、そこまで思つて。なんのことはない。この女は私と同じことをしているのではないかと思ひ直した。中途半端なプレイではかえつて欲求不満がつるばかりだと、本能的に知っているのだ。私と違つて積極的にパートナーを探そうとしなかつたのは、彼女がそれだけ内向的なのだろう。そして、それはマゾ女としての資質でもある。

昌美が絶頂をきわめたとき、私も背筋が痺れるような感激に貫かれていた。

ひと息いれることにして、昌美の縄をほどいた。汗に濡れそぼってぐったりしている昌美をベッドに運んでやり、自分は部屋の中央に置いた椅子にビールの小瓶を持って陣取った。冷えたビールを一気に喉へ流し込む。

煙草を一服し終えたとき、ようやく昌美が頭をもたげた。

「いつまでも寝そべっていないで、ここへきて正座しろ」

昌美は私以上に喉が乾いているはずだが、飲み物をねだらなかつた。黙って身を起こして、私の前に膝を揃えて座った。

「お前は正座の仕方也不知道なのか」

叱責されて、昌美はきよとんと私を見上げた。

「お前はマゾ牝だ。マゾ牝らしく、脚を開いて座れ」

昌美は私の意図を理解した。正座したまま両脚を三十センチほど開き、また私を見上げる。

「上品ぶるんじゃない。直角になるまで脚を開け」

休んでいるあいだに白くなっていた肌が、またピンク色に染まり始めた。昌美はさすがに恥ずかしそうに顔を伏せて、それでも命令に従った。

「手は頭の後ろで組め。それが、マゾ牝の正座だ」

私は足の指で股間をくじつてやった。

「お前は、どんなときでも躡けてほしいと願ったな。これからは、どんなときでも脚を閉じて座ることは許さない。俺と一緒にできないときにも、だ。わかったな」

昌美は驚いた表情になって顔を上げた。自分がなにを望んだのか、今になって理解したのかもしれない。だが、後悔はしていないようだった。次第に瞳が潤んでくる。喫茶店や電車の中で今と同じ座り方をしている自分を想像したのかもしれない。

「はい、わかりました」

「いちいち顔を見るんじゃない」

つぎつぎとマゾ牝の作法を叩き込んでやる。

「自分がいちばん奉仕することになる部分を常に見ている。主人の顔を見るなどという大罪には、厳しい懲罰が待っているぞ」

昌美は視線を下げて、ズボンの中心を見つめた。頬が、さらに赤く染まる。私のほうも、ますます屹立する。

「検査の結果を教えてほしいか？」

私の妻にふさわしいか調べるといふ名目で、ここへ連れ込んだのだった。私が本気で言っていたと、昌美は受け取ったのだろう。全身のピンク色が、すうっと褪せていく。わかりやすい女だ。

「わたし……不合格なんでしょうか？」

教えを破って、不安そうに私の顔を見る。

「わかっていれば世話はない。お前は、俺の妻にふさわしくない」

「ええーっ？」

昌美は立ち上がるうとした。

「誰が姿勢を崩していいと言った」

昌美は浮かしかけた腰を落として、また私の顔を見つめる。不合格と言っておきながら、まだ躰けを続けている私の真意を図りかねているのかもしれない。

「お前は三人もの男に穢されているんだぞ。しかも、ちよつと縛られただけで気をやる淫乱なマゾ牝だ。初対面の男にべらべらとSEXの体験を吹聴するし」

「でも……」

「勝手に喋るな。お前のような女は、俺の妻にふさわしくない。だが……」



私は昌美を見据えた。昌美の顔は泣き出しそうな形にこわばっている。

「マゾ牝奴隷としてなら、話は別だ」

一瞬、昌美の表情が動いた。なにか言いたそうだったが、私は言葉をかぶせる。

「俺も会社勤めの身だ。スキャンダルは御免だから、形式的に籍は入れてやってもいい。

世間並みの披露宴もしないわけにはいかない」

私の言葉を理解するにつれて、表情から固さがとれていく。

「だが、勘違いするなよ。お前の待遇は、あくまでもマゾ牝奴隷だ。妻とは違って、なんの落ち度もないのに、ただ俺の気晴らしに折檻することだってある。誰かに貸し出すかもしれないし、飽きたら売り飛ばす。ピアス、入れ墨、焼き印——俺の好きなように肉体を改造するぞ」

二十年もしたら、ほんとうに売却するかもしれない。しかし、それは彼女のためでもある。肉体改造に関しては——ピアスくらいのものだ。修復不能な改造を施すのには、生理的な嫌悪感がある。それとも、独占欲が講じて実行してしまうだろうか。いずれにせよ、昌美が本心ではなにを望んでいるかだ。マゾ牝奴隷とはいっても、互いの極端な性癖を満たし合う二度と得難いパートナーなのだ。

もちろん、今の昌美にはそこまでの理解はないだろう。私の言葉を真に受けて——恐怖ではなく恍惚の表情を浮かべて私を見上げている。

「昌美は柴田様のマゾ牝奴隷です。お好きなように躑けて、いえ、虐めてください」  
私が一方的に宣告した身分を、昌美は受け入れた。

## アナルバージョン

「いい覚悟だ。それなら、お前を俺のマゾ牝奴隷にしてやる」

こんなことくらいで破裂してくれるなよと、私は自分の心臓に頼み込んだ。それほど、私は興奮している。それを昌美に気取られないよう、ゆっくり立ち上がった。シャツとズボンを脱ぎ、昌美の大きく開いた脚の間に立ってブリーフを脱ぎ捨てた。

余談だが、私はブリーフ派だ。子供っぽいとか、精子の生産が抑制されるとか、世間一般の評判は芳しくないが、股間をびっちり締めつけられる心地良さは捨てがたい。

剥き出しになって、まるで十代の少年のように聳え勃ったペニスで昌美の目の前に突きつけた。

「マゾ牝奴隷として、御主人様に挨拶をしろ」

昌美は腰を浮かして、肉棒に唇を近づけた。

「マゾ牝奴隷の昌美でございます。わたしの身体も心も御主人様の物です。どの……穴でも、お好きなように虐めてください」

けっこう、それらしい台詞を吐いた。こういうシーンも、オナニーの時に空想していたのかもしれない。

昌美は両手を頭の後ろで組んだまま、真上からペニスを啜えた。しかしテクニクは、台詞に比べて稚拙だった。頭を上下に動かすたびに歯が当たったし、舌の使い方も知らない。だが、身体全体を揺すってひたむきに奉仕する姿は、私の残酷な欲望をそそった。

「このへたくそめ！」

頭髮を両手でつかんで、昌美の動きを封じた。

「歯を立てるな。舌で舐めるんだ」

私は腰を揺すって、喉の奥まで貫いてやった。

「んぐ……ぐふっ……」

昌美はむせながら、されるがままになっていた。どこまで耐えられるか試してやりた

かったのだが、暴発しそうになつたので腰を引いた。

「お前はフェラチオも満足にできないのか」

半分は照れ隠しで罵つたのだが、昌美はまた私の言葉を真に受けた。両脚を開いた姿勢のまま土下座したのだった。

「申し訳ありません。初めてだったので、どうしていいかわかりませんでした。今度からは気をつけます」

●学生が初体験で当然のようにフェラチオをする時代だが、二十五歳で未経験ということだって、あり得ないことではない。昌美は三人に抱かれているが、その回数は十回ほどだ。SEXに関しては初心者もいいところだろう。

(そのくせ、縛られてイクんだからなあ……)

昌美の被虐願望には底知れない深さがある。どこまで私の責めについてくれるか、たしかめてやりたくなつた。

私は、あらためて昌美を正座させた。

「お前を抱く前に、たっぷり罰を与えてやる」

教えられたとおりにペニスを見つめている昌美の表情が、ちらつと動いた。

「素直に身体検査を受けなかった罰として、ケツに三十発の鞭打ち。縛ったときに勝手に気をやった罰として、乳に三十発。そして、何度も主人の顔を直視した大罪にはマコを三十発。フェラチオがまずかったのは、未経験だったというお前の言葉を信じて情状酌量してやる。背中へ十発。合計して百叩きの刑だからな。覚悟しろ」

昌美は頭の後ろで組んでいた手を前について、また土下座した。

「はい、お気の済むまで罰してください。鞭をいただくのは初めての経験ですから、途中で泣くかもしれません。でも、けっして甘やかさないでください」

「つまらん心配はするな。汗と涙で顔がぐちゃぐちゃになるまで、悲鳴で喉がつぶれるまで、身体中が鞭痕で埋め尽くされるまで、たっぷりと罰を与えてやる。だが……」

私は声の調子を変えて尋ねた。

「お母さんと同居しているんだろ。裸を見られる心配はないのかな？」

昌美も、ふっと醒めた表情に戻って顔を上げた。が、ちよつと考えて。

「だいじょうぶです。お風呂上がりだけ気をつけます」

「それなら、執行猶予をつける理由はなにもないな。マゾ牝奴隷にふさわしい懲罰を与えてやる。立て」

私はサデイストの口調に戻って言った。

昌美を部屋の中央に立たせて両手を頭上で縛り、剥き出しの梁から吊す。両脚を大きく開かせて足首と膝に縄を掛け、部屋の両隅にある柱に結びつける。それだけで昌美は切なげに喘いで、股間を熱くたぎらせる。

バッグからバラ鞭を取り出して、人の字形に固定された昌美の眼前で素振りをくれた。SMプレイで常用されるバラ鞭にも、実はいろんな種類がある。薄いゴム製で苦痛はほとんど与えないくせに音だけは派手なお遊び向けのものもあれば、太い本革を編み込んで先端には結び瘤まで作った九尾鞭そのままの本格派もある。私の愛用しているのは、もちろん後者だ。さすがに結び瘤は敬遠した（自称マゾ女でも、数発でギブアップする）が、オイルを塗り込んでしなやかに重くしてある。

バシン！

私は昌美の背後に立って鞭を鳴らした。

「覚悟はいいな！」

「はい……」

生まれて初めて鞭打たれる昌美の声は、さすがに震えていた。

私は慎重に狙いをつけて、腋の下から背中にかけて斜めに鞭を振り下ろした。乾いた音が炸裂する。昌美は小さく呻いたが、身体はほとんど動かさなかった。鞭の先端が肌に当たる寸前に手首を返す、音は派手だが苦痛の少ない打ち方をしていたし、力もあまり入れていなかった。ひとつには、鞭打ちに対する昌美の反応を見るつもりがあった。それ以上に、背中を打つのが怖かったせいもある。

背骨は驚くほど脆い。もろに鞭が当たれば脊髄神経を傷つけてしまうと、本で読んだことがある。運が悪ければ死ぬし、そうでなくても半身不随にしてしまう危険があるという。それが事実かどうか、試してみる蛮勇は私にはない。

二発目は、もうすこし強く。背中ではなく脇腹を打った。昌美は、ほとんど反応しなかった。背骨に当たらないよう気をつけながら三発、四発と強くしていったが、問題なく昌美は耐えていた。プレイ経験のない女（男でも同じだが）の中には、妄想の上では苛酷な責めを望むくせに、実際の苦痛にはからきし弱いというタイプがいる。あるいは昌美もそうではないかと疑っていたのだが、無用の心配だったようだ。

この女なら、本気で鞭打っても大丈夫だ。十発目を肩に叩きつけたとき、私は確信していた。

「小手調べは終わりだ。これからが本番だぞ」

たっぷりバツクスイングをとって昌美の尻を打った。

バシン！

これまでとはまったく違う、重い弾けるような音がした。

「う……」

昌美は背中を反らせて腰を前に突き出した。そこへ二発目を叩きつける。

「くう……」

呻き声が大きくなる。

ちよつと手を休め、昌美が息を吐いた瞬間を狙って往復びんたの要領で四連発。昌美はまた反り返って呻いた。が、それ以上の反応は示さなかった。さらに二十四発、スナツプを利かせて鞭を振るつたが、昌美は悲鳴もあげずに耐えた。

「俺の折檻に泣きをいれないとは、なかなかいい根性をしているな」

赤い線条の鞭痕をくつきりと刻み込まれた尻を、手荒に撫でてやる。昌美は頭を垂れて目を閉じ、甘美な苦痛に陶然としていた。

「つぎは女の急所へ三十発だ」



私は昌美の正面にまわって鞭を水平にかまえた。

「悲鳴をあげなければ褒美をやる。耐えてみせろ」

おそらく耐え抜くだろうと、私は予測していた。昌美の鞭への反応は、典型的な未経験者のそれだった。未経験者の反応は、正反対に別れる。最初から泣きわめくか、耐えられるだけ耐えて限界に達したところで、手加減を乞う手順をすつ飛ばしてプレイ中断のキイワードを口にするか——その、どちらかだ。プレイ経験者は、わりと早い段階で悲鳴をあげる。それほど切迫した悲鳴ではない。悲鳴をあげることで、被虐意識を高めていくのだ。あまりに演技の見え透いた悲鳴に、白けてしまうこともあるが。

いずれ鞭に馴れてきたとき、昌美はどう振る舞うだろうか。そんな先のことまで頭の隅で考えながら、私は乳房への最初の一撃を振るった。

肉を打つ音が部屋に響き、形の良い乳房が大きく揺れた。

「うぐ……」

昌美は息を詰まらせ、顔をゆがめた。が、悲鳴はあげない。

二発目は鞭の根本まで叩きつけて乳房を薙ぎ払った。昌美は恍惚の表情を浮かべた。

三発目は逆に鞭の先端で乳首を掠めてやった。

「あつ……！」

昌美は小さく叫んでのけぞった。悲鳴ではなく、悦びの哭声に近い。

五発、六発と、たすき掛けに斜めに打ち下ろした。乳房は無惨にひしゃげて震え、昌美の顔に苦悶と喜悦が交錯する。それは、まさしく真性マゾ女の至福の表情だった。私は今すぐにも昌美を組み敷いて貫き犯したい欲望を抑えながら、二十の鞭打ちを終えた。

同じ数だけ鞭打たれても、筋肉が薄く肌も鋭敏なぶんだけ、昌美の乳房は尻よりも無惨な姿になっていた。胸一面に真紅の線条が刻まれ、数か所は紫色に腫れていた。皮膚が切れて出血している部分もあった。

ここまでで七十発。右腕に重い疲れを感じていた。ひと休みすることにして、またビールの栓を抜いて半分ほど飲んだ。

「どうだ、生まれて初めて味わう鞭の味は？」

昌美は顔を上げて、とろんとした目で私を見た。肩で息をしているが、それほど消耗している様子はなかった。

「悲鳴をあげなかつたから、約束どおり褒美をやるう」

私は昌美の髪をつかんで顔を仰向かせ、半開きの唇にビール瓶を啣えさせた。瓶の傾

きを加減して、拷問にならない程度の勢いでビールを流し込んでやる。

ビール瓶が空になったら、折檻の再開。私はビール瓶を左手に持ったまま、右手の鞭を予告抜きで真上に跳ね上げた。鞭の束が昌美の股間に弾けた。

「きゃあっ！」

昌美はついに悲鳴を噴きこぼした。私は距離を調節しながら、立て続けに鞭を跳ね上げる。鞭の先端が股間に食い込み、鋭敏な肉芽をしたたかに擦り上げる。

「いやあっ！」

昌美は両手首を縛った縄に縊りついて爪先立ちになった。私は鞭を股間に通して両手で昌美の身体をさらに吊り上げながら、前後に揺すった。

「さすがにこたえたようだな。あと二十七発、たっぷり泣かせてやる」

二歩下がって、四発目を打った。

「痛い！」

これまでこらえていた埋め合わせをするかのように、ひと打ちごとに昌美は悲鳴をあげる。しかし、苦痛を拒絶する悲鳴ではない。悲鳴に混じる嗚咽の中に、私は甘やかな響きを聞いた。被虐に陶醉する女を責めるといふサディストとしての至福に酔いながら、

私は三十発の極刑を執行し終えた。

鞭の嵐が治まると同時に、昌美の全身から力が抜けた。膝が折れて、両手首の縄に全体重がかかる。縄を緩めると、汗にまみれた裸身はずると床にへたり込んだ。

私は昌美の腰を膝で組み敷いて、高手小手に縛り直した。

「そろそろ引導を渡してやる。さっさと立て」

髪の毛をつかんで引き起こし、バスルームへ連れて行つた。

「しやがんで脚を開け」

昌美はまだ正気に還っていないのか、恥じらうそぶりも見せずに命令に従つた。私はシャワーを手に取り、昌美の目の前で分解した。ノズルを外してホースだけにして、先端をアヌスにあてがつた。

「いやです。赦してください」

ようやく昌美は私の意図を察して、ホースから逃れようと腰を浮かした。私は左手で肩を押さえながら、右手でホースを挟り込んだ。

「マゾ牝奴隷に『いや』という言葉は許されていない。覚えておけ」

ホースを五センチほど押し込んでから、コックをひねつた。

「ひやあ！」

昌美の腹腔に冷水がどくどくと注ぎ込まれる。

「あ……くう……」

昌美は膝立ちのまま逃げたが、ホースは外れない。私はだいたいの見当で一リットルばかり注入してから、コックを閉じた。

「トイレに行くまで漏らすなよ」

念を押しておいてホースを引き抜き、トイレへ追い立てる。切迫する便意に昌美は顔をゆがめながら、前屈みで歩く。私は洋式トイレの便座をわざと上げて、昌美を座らせた。いやでも直角に脚を開かなければ、尻が便器にはまってしまう。

「出していいぞ」

私の声と同時に、激しい水音が響いた。生半可な浣腸と違って、大量の冷水浣腸は数分とこらえられない。「見ないで」などと殊勝なことを言っている暇もないのだ。

水の噴出する音に混じって、ときおりドボンと固形物の落下する音が聞こえる。

「派手な音だな。俺も小便がしたくなかった」

苦勞してペニスを下向きにして、私は昌美の股間に向かって放尿した。

「ひどい……」

昌美は目に涙を浮かべて私を見上げた。私は、ぎくつとした。昌美の生理的嫌悪に触れたかと思つた。だが、すこし違うようだった。

「でも……奴隷だから、なにをされても文句は言えないんですね」

涙で化粧の崩れた顔を伏せてつぶやく昌美。惨めさに陶醉しているようだった。ならば、もつと酔わせてやる。

「違うな。マゾ牝奴隷は、なにをされても感謝と悦びを持って受け入れなければならぬ。それに、これは——お前の穢れた身体を清めてやっているんだ。礼を言え」

「はい……ありがとうございます」

私は、硬度と角度を回復した。ヘニスを昌美の唇に押しつけた。昌美はそれを口に含み、頬をすぼめて雫を吸い取つた。あるいは、昌美の願望のひとつに飲尿もあるのかもしれない。雑菌の塊でしかない黄金は苦手な私だが、尿は清潔だからあまり抵抗がない。マゾ女の希望を無理強いの形で叶えてやるのがサディストの務めだと、私は思っている。もちろん、あれこれ注文の多いわがまま女につきあうつもりはないが。

清掃奉仕は短い時間でやめさせて、簡単に尻を拭いてやってから昌美をバスルームへ

連れ戻した。シャワーを組み立て直して、冷水で下半身を洗ってやった。これで準備完了。私は昌美をベッドへ追い上げて、再び結跏趺坐を組ませて縛った。前へ突き倒して座禅転がしの形にする。

ローションを指に掬い取って、アヌスに塗りつける。指二本がなんとか挿入できるようになった。もつと時間をかけて揉みほぐしたほうがスムーズにいくが、このまま強行しても切れ痔になったりはしないだろうと見当をつけた。それに、女に快樂を与えるためのアナルSEXが目的ではない。犯し辱め苦痛を与えるのが目的だ。

「いくぞ、覚悟はいいな」

私は、董色の肉襞の中心にペニスをあてがった。

「はい。お尻のバージンを奪ってください」

小さいがはっきりした声で、昌美はこたえた。

私は膝立ちのまま、ぐいと腰を突き出した。強靱な筋肉の輪に押し返されそうになったが、かまわず突き進む。

「あ、ぐ……」

昌美が呻く。それで力が抜けたのか、「にゆるん」といった感じで括約筋の抵抗を突破

した。ペニスの先端は柔らかな腸に包まれ、根元だけがきつく締め付けられる。

「熱い……痛い……」

昌美は甘い声で苦痛を訴えた。私はそれを無視して、両手で昌美の腰をつかんで前後に揺すりたてた。そして、これまでに体験したどんなSEXよりも強烈な快感に我を忘れて、一分ともたずに果ててしまった。

私は立ち上がって昌美の身体を起こし、まだ萎え切っていないものを口に含ませた。

「お前が汚したんだ。お前がきれいにしろ」

実際のところ、大量の冷水で洗浄した直腸にはひとかけらも汚物は残っていないのだが、それでも心理的な抵抗はあるはずだ。

しかし昌美は、ためらうことなくペニスに舌をからませてきた。口いっぱい頬張って、丹念に舐めまわす。驚いたことに、私はまた硬くなってきた。二十代の頃でさえ、三十分は休まないと二ラウンド目は無理だったのに、すぐできそうな感じだった。私は昌美の頭をつかんで、喉の奥までペニスを押し込んだ。

「ぐえ……」

昌美は苦しそうに呻いたが、逃げようとはしなかった。マゾ女が責めに耐えれば耐え



るほど、サディストは残虐になる。私は昌美を仰向けに転がした。胡座に緊縛した脚を  
組み敷いてのしかかり、縄目から突出した乳房を揉みしだいた。いや、力まかせにこね  
くり回した。

「くうう……」

昌美は顔をしかめて苦痛に耐えた。痛いのは乳房だけではない。背中で交差した手首  
には、もろに二人分の体重がかかっている。仰向けに開脚したまま膝頭がマットにめり  
込むまで折り曲げられれば、相当に身体の柔軟な女でも苦痛を感じるはずだった。にも  
かかわらず、昌美は慈悲を乞おうとはしなかった。どころか、天井に向かって開陳され  
た股間は濡れ乱れ、照明を反射して淡いピンク色に妖しく光っていた。濡れ方は、淫乱  
きわまりないマゾ女のそれだった。そして色は、援助交際で散らした●五歳の処女より  
も清らかだった——というのは、もちろん私の心象風景だったが。

私は乳房を握りしめたまま腰を浮かし、硬度を取り戻した肉棒をピンク色の花卉に突  
き立てた。濡れそぼっているのに、ぎちぎちと締め付けてくる。

「ああん……」

昌美はとびきりの甘い声で泣いた。十回足らずの経験とはいえ、いくらかは開発され

ているようだ。私はゆっくり抽挿して、昌美のきつい感触を満喫した。

「あ……あ……あ……」

ピッチを上げると、泣き声も早くなる。

「あん、あん、あん……」

さまざまに腰を動かして、急所を探る。

「あん……あ、あ……あう……」

右手をおろして肉芽をまさぐると、昌美の声は切迫した悲鳴に変わった。硬くしこつた肉芽を剥いて親指の腹で転がしながら、剛直をいったん抜去して腰を引き、全身をぶつける勢いでひと息に刺し貫く。

「あああーっ！」

肉壁が痙攣しながら私を締め付ける。昌美はあっさりと絶頂をきわめ、わたしも同時に放出した。

ごく普通の男女の交わりなら、ゆっくりと引いていく波間に漂っている女を優しく抱き締めてでもやるところだが、真性マゾ女には、そんな気配りは無用だ。まだ指の間で真紅に充血している肉芽に爪を立てて抓ってやった。

「ひぎやあ！」

たゆたつていた高みから引きずり下ろされて、昌美は絶叫した。

「いつまでも惚けているんじゃない。事が終わったら、まず主人の持ち物をきれいにするんだ」

身体を起こしてやると、昌美は緊縛された上半身を乗り出して、私の股間に顔をうずめた。萎え果てたペニスを、いとおしそうに頬張る。

数分の清掃奉仕のあいだ、さすがに今度はぴくりとも反応しなかった。

これで、本日の躰けは終了。二十四時間マゾ牝奴隷であることを望む昌美だが、当分のあいだは人間の真似事をさせてやらなければならない。昌美の縄をほどいて、バスルームへ連れて行った。

私の見ている前で自分の後始末をさせる。それから検査を受ける姿勢を取らせた。

百発の鞭痕は服で隠れる部分に集中しているから、問題はない。だが、縄の痕は隠しようがない。バスタブに湯を張って、ふたりで浸かりながら入念にマッサージしてやる。その間に、マゾ牝奴隷の心構えを教え込んでやった。

——下着は禁止する。母親と同居している間は特別に許可してやるが、外出したらす

ぐにトイレで脱ぐこと。褌、W凸バンドなどは私の指示で装着すること。

——スカートは、普通に座って尻が剥き出しになる丈にすること。パンツ類は禁止。

ケツが剥き出しになるホットパンツとか股間のラインまで浮き出る薄手のスパッツ（スカートの重ね着は厳罰）など、露出度の高い服装は例外とする。

——座るときには、必ず脚を直角に開くこと。

——マゾ牝奴隷は主人の命令に絶対服従すること。拒否は許されない。

——「痛い」「恥ずかしい」「赦して」は、言っではいけない。「気持ちいい」「嬉しい」「もっと虐めてください」しか言うな。まして、「いや」は極刑に値する禁句だ。

——服装や座り方の指示は、私のいない場所でも守ること。やむを得ない事情で違反したときは、あとで正直に告白して相応の懲罰を受けること。

こんな無茶苦茶な命令が、すべて守られるはずもない。私の永年の妄想をそのまま言葉にしただけに過ぎなかった。だが、命令違反は懲罰の口実になる。気の向くままに折檻するとは宣言したが、やはりなんらかの動機がほしい。こんなことを考えるのは、私の心のどこかにまだSM「プレイ」の観念が残っているからだろうか。

三十分ほどマッサージを続けると、縄の痕はほとんどわからなくなった。二十代の肌

は回復力が早い。

マゾ牝奴隷の心構えをさっそく実践させて、素裸の上にスーツを着させた。下着類は没収したが、パンティストッキングだけはバッグに入れてやった。

ホテルを出ると、五月の空はすでに暮れ始めていた。

### 薔薇色の未来設計

サウナで汗を流し居酒屋で夕食兼用の祝杯をあげてから帰宅すると、昌美からの留守伝がはいっていた。母親に怪しまれずに着替えられたことと、来週の土曜日を今から胸をときめかせて待っていますという他愛ないメッセージだった。

来週から本格的に調教してやろう。縄を掛けた上に露出度の高い服を着せて、あちこち引き回してやる。バラ鞭ではなく、硬い一本鞭で哭かせてやる。

しかし……ふと、私の胸を不安がらすめた。今から目一杯ハードな折檻と拷問を与えていたら、先行きどうなるのだろう。私には、継続的な調教の経験がない。マンネリが早々に訪れるのか、生死に関わるところまでエスカレートしていくのか。マンネリに陥

つてしまえば、これは世間一般の倦怠期と変わりが無い。かといって、無制限のエスカレートは恐ろしい。まあ、今から思い悩んでも仕方のないことではある。成り行きにまかせられない。

しかし、成り行きにまかせておけない心配もある。それは、ふたりの年齢差だ。三十八歳と二十五歳。今は、いい。だが、二十年も経てば——還暦を目前に控えた男と、「四十盛り」の女だ。まして「五十ゴザ筆り」に私の体力がついていけるかどうか。その頃にも昌美がハードな責めを望むようなら、ほんとうに誰かに売り飛ばすなり譲るなりしなければならぬだろう。

昨日まで、こんなことは考えてもみななかった。十年も二十年も先の心配までするといふのは——裏返せば、昌美への独占欲、執着心の表われなのだろう。

もちろん、贅沢な悩みだということとはじゅうぶんわかっている。マゾ牝奴隷を持ちたいと願うサディストのうち、何十人にひとり、いや何百人にひとりが夢を実現できるだろうか。多くのサディストは、自分の理想とするフリーのマゾ女に巡り会う幸運にも恵まれないのではないだろうか。そして、幸運に恵まれた者も、経済的な理由から夢を諦めなければならぬかもしれない。マゾ牝奴隷を飼う以上は、折檻に使える部屋もほ

しい。3LDKのマンションあたりでは、悲鳴が筒抜けになってしまふ。ありていに言つてしまえば、マゾ牝奴隷と主人の関係は、仮構なのだ。非日常的な世界を維持するには、それなりのコストがかかる。

この点でも私は恵まれている。皮肉なことに、最初の結婚の失敗が私に財産をもたらしてくれたのだ。

妻をマゾに調教しようとして失敗して離婚となったとき、マイホーム資金から生命保険の解約金まで、根こそぎ慰謝料に取られた。三十歳のときだ。私は捨て鉢な気分になっていた。ボーナスが出たとき(さいわい、これは差し押さえを免れていた)、全額を株式投資に突っ込んだ。いや、投資ではなく投機だ。二十円まで暴落していた倒産寸前の会社を五万株買ったのだ。破産してやれ、と思ったわけではない。その会社がピンチに追い込まれたのは公害への賠償金額が莫大だったせいだが、潰れてしまえば公害訴訟の矛先は行政に向けられる。その会社の政界へのパイプの太さから考えても、裏からの支援があるはずだと読んだ。そういう推理は、ちよつと事情を知っている者なら簡単にできる。だが、ふつうのサラリーマンにはボーナス全部を投じる度胸がない。絶対確実どころか、相当のリスクがあるのも事実なのだから。財産のほとんどを筆り取られてイチ

かバチかの心境になっていたからこそ、私はギャンブルを打てた。

そして、読みは当たった。半年で株価は五百円まで上がった。二千五百万円の資金ができ、最初の大博打で糞度胸もつき——あとは、楽なものだった。株式市場は百年に一度といわれる大暴落を迎えたが、その時点では再び幸運にも、私の資金配分はほとんどがキャッシュだった。大底を買い、リバウンドが行き過ぎたところでドデンの空売り。さすがに、それ以降は慎重な姿勢に転じたが、こまめに売買を繰り返して、今では最初の投入資金の三百倍近くまで達している。もちろん、パソコンで株価を分析したりインターネットで情報を収集したりと、ちよつとした相場師くらいの努力はした結果だが。資産の三分の一も取り崩せば、マゾ牝奴隷を飼うのにふさわしい屋敷（は、大袈裟だが）を持てる。残った財産を手堅く運用するだけで、将来の生計も確保できる。医者や弁護士に比べれば一桁少ない年収でも、ローンや貯金にまわさなければ、それなりに優雅な生活を維持できる。

私は昌美との甘い（昌美にとっては厳しく辛い）生活をあれこれと想像して、無上の幸福に酔いしれていた。



## 2章 苛酷な躰け

露出ファッション

昌美をどういふふうに躰けてやろうかと考えながら、長い長い一週間が過ぎた。今日の待ち合わせは午前十時を指定してあった。場所は私鉄の改札口。まずホテルへ連れ込んでマゾ牝奴隷にふさわしい身体にしてやり、それからデート。別の言葉で言えば屋外調教。そして夕方から本格的に躰けてやるつもりだったのだが、予定を変更しなければならぬかもしれないと私は思い始めていた。すでに十時五分。待ち合わせの時刻に遅れるのは女の習性みたいなものだが、マゾ牝奴隷の身に許されることではない。

……しかし。まさか、心変わりしたのではないだろうか。昌美は二度と私の前に姿を現わさないのではないだろうか。などと、不安な気持ちちが押し寄せてくる。

(強気でいけ)

自分を叱咤する。私以上に昌美のほうが、自分を理解してくれるパートナーに飢えて

いたのだ。私が昌美を捨てることはあつても、その逆はない……はずだ。

また腕時計を見る。十時七分。顔を上げると、ピンクのスーツを着た昌美が、おそるおそるといった感じでやって来るのが見えた。半袖で、スカート丈は膝上十五センチと  
いったところか。素足にハイヒールを穿いている。

「お待たせして、ごめんなさい」

しおらしい言葉を口にはしても、これくらいは赦してもらえるだろうという甘えが見え見えだ。肌を許した男への馴れが感じられた。

私は無言で昌美の手首をつかみ、コインロッカーのコーナーへ連れていった。昌美の表情に怯えが浮かんだ。無言のまま、私はスカートを捲り上げた。

「あ……」

レースをあしらった白いショーツが、スカートの下から現われた。ばかりか、ごていねいにスリッパまで着込んでいた。

「なんだ、これは？ 下着は禁止すると言ったはずだぞ。まさか、ブラまで着けてるなんてことはないだろうな」

スーツの上から胸をつかむと、これは柔らかい生乳の感触だった。

「向こうの駅のトイレで脱ごうとしたんですけど……恥ずかしくて」

「そのせいで、もっと恥ずかしい目にあうことになるのは覚悟してきたんだろうな。ここで脱げ」

言い訳には耳を貸さず、私は当然の命令を下した。

「赦してください。あとでどんな罰でも受けますから」

昌美はスーツを片手で押さえてうつむいた。本気で厭がっているようだった。だが、これくらいで赦しては、躰けにならない。

「昌美。お前は、俺の何なんだ」

私は、わざと大きな声でたずねた。昌美は顔を伏せながらも、ちらちらと私の肩越しに視線を走らせている。そこに誰かいるらしい。だが、かまいはしない。これが（他人から見れば）他愛ないSMプレイだということは、はっきりしている。女子校生なんかは平然とコインロッカーで着替えをしているご時世だ。女をちよつと半裸にさせたくらいで駅員を呼んでくるお節介な人間は、都会にはいない。

「お前は、俺の何なんだ。ちゃんと答えろ」

語調をさらに強めて、昌美を詰問した。

「昌美！」

昌美は顔を紅潮させながら、小さな声で私の問いにこたえた。

「わたしは……旦那様のマゾ牝奴隷です」

もつと声を大きく——とは、強制しなかった。大丈夫だとは思うが、あまり長くここにいないほうがよい。

「マゾ牝奴隷ならマゾ牝奴隷らしく、主人の命令に服従しろ。ここで下着を脱げ」

私は身体の向きを変えた。コインロッカーの利用客はひとり、五十絡みの男だった。荷物を入れるふりをしながら、横目でこっちの様子をうかがっている。外の通行人は、まだ気づいていない。

「さつさと脱げ。それとも、もつと見物人を呼んでほしいのか」

昌美は涙を浮かべながら、恨めしそうに私を見上げた。私は、じつと昌美をにらむ。にらめっこに負けるのは昌美に決まっていた。ふるえる手が上着にかかった。

上着をはだけてスリップの肩紐を腕から抜こうとしたが、あせっているのかえって手間取る。たったひとりの見物人は、昌美の美乳をゆつくりと鑑賞できたはずだ。

スリップを腰まで下ろして上着を羽織り、スカートのホックを緩めると、ショーツと

一緒に裾から抜き取った。それを大きめのハンドバッグへ入れる。

私はハンドバッグを取り上げて自分のスポーツバッグへ入れ、それを昌美に持たせた。「それを持ってついて来い」

ようやくコインロッカーを閉じた男の後ろをすり抜けて外へ出ると、私はさっさと歩き出した。重いスポーツバッグを両手で抱えた昌美が息を切らせて追ってくる。

ホテルへ向かう途中で、若者向けのファッションを扱っている店の前で立ち止まった。超ミニのスカートやヘソ出しTシャツなど、露出的な服が店頭に並んでいる。

昌美が追いついてきて、数歩離れたところから私の様子をうかがっている。

「服のサイズはMでよかったのかな？」

「ほんとうに赦してください……」

昌美は、もう半ベソをかいていた。

「赦すって、何を？」

私は意地悪くとぼける。

「今の服でも、すごく恥ずかしいんです。これ以上は……」

初心者とは思えないほど苦痛に耐える昌美だが、羞恥心は強いようだ。そうと知れば、

ますます虐めてやりたくなる。

「主人の命令には絶対服従だと、何度言えばわかるんだ。お前の好き勝手にさせていては躰けにならないじゃないか」

声が聞こえたのか、店の奥にいた二十歳くらいの女店員がこちらを振り返った。好奇心丸出しの表情で、私と昌美を見比べている。私は知らんふりで、黒いビニールレザアの超ミニスカートを手に取った。店の中へは行って、上衣にはフリルをたっぷりあしらったノースリーブのブラウスを選ぶ。シースルー気味だが、フリルで肝心な部分をカバーするデザインになっている。なにより、首まわりがぴっちり閉じているのがいい。フアッションのバランスと現実的な問題も考えて、ヒールの低いサンダルも買うことにした。

「試着室で着替えさせたいんだが」

「あちらのカーテンの奥です」

まだ店の前で身をすくませている昌美の腕を引っ張って、試着室へ押し込んだ。昌美は哀願の眼差しで私を見上げたが、無駄と悟ってカーテンを閉じた。見ている前で着替えせるつもりでいたのだが、さすがにかわいそうになったので、その不遜な行為は黙認

してやることにした。

試着室にはいった後は、それほどためらうこともなく着替えたようだった。が、カーテンはなかなか開かない。

「まだか。なにをぐずぐずしてるんだ」

「もう終わりました」

やっとカーテンが開く。私は昌美の服装を見る前に、手に持っているたたんだスーツのほうに目が行った。今時珍しい——と言いたくなるほどきちんと躡けられた女性だ。こういう女性にまったく別の「躡け」を施してマゾ牝奴隷に調教するというのは不憫で……それだけ、征服欲を掻き立てられる。

私は女店員を呼んで代金を支払い、スーツとハイヒールを紙袋に入れてくれるように頼んだ。

「検査をするぞ。脚を開いて、両手を頭の後ろで組め」

女店員がスーツを包んでいるのをちらりと横目で見てから、昌美は諦めた表情になって命じられたポーズをとった。膝がかすかに震えている。

脚を開くとタイト気味のミニスカートは裾がたくれて、腿の付け根ぎりぎりまで露出

された。腕を張っているのでブラウスの生地が胸に貼り付き、きれいに肌の色が透けている。私は満足してうなずいた。

「いいだろう。行くぞ」

女店員から紙袋を受け取って、私は店を出た。

午前十時半のホテル街は人通りもまばらで、それだけに昌美の露出的な服装は人目を引いた。すれ違う誰もが好奇の目を昌美に向け、それから私を一瞥する。服装よりも、大きなスポーツバッグを抱えてよたよたと歩いていることのほうが興味の対象になったのかもしれない。こっそり振り返って見ると、昌美は私の予想どおりに全身を羞恥に染めながらうつむいて歩いていた。

しばらくはあちこち引き回してやりたかったが、あとのスケジュールが狂ってしまう。どうせ、もつと恥ずかしい格好でもつと恥ずかしい場所へ連れていくのだ。適当にホテルを選んで中へはいった。

服を脱いで床に座るように言うと、昌美は素直に命令に従った。先週教えたとおりに膝を直角に開き、両手を頭の後ろで組んだ。肘を横に張って、挑発するように胸を突き



出す。その姿勢からも、肌を許した男への馴れがうかがえる。

「お前にはマゾ牝奴隷としての躰けを基本から叩き込まなければならぬようだな」

私は腕組みをして昌美を見下ろしながら、うんざりした口調をよそおって言った。

「勝手に下着を着けてきたり、ミニスカートに穿き替えるだけのことであれこれ口答えしたり。自分がマゾ牝奴隷だという自覚が、まるでない」

昌美は神妙に頭を垂れているが、長い髪に隠された顔は責めへの期待に火照っているはずだ。もちろん、期待にこたえてやるとも。

「いつでも自分の身分を思い出せるように、まずはお前の身体をマゾ牝奴隷にふさわしい姿にしてやろう」

昌美を立たせてバスルームへ連れていき、両手を縛ってシャワーのフックから吊す。

脚を開かせ、膝の裏に洋服ハンガーをあてがって縛り付けた。

昌美の動きを完全に封じてから、用意しておいた品をスポーツバッグから取り出した。

「マゾ牝奴隷は主人にすべてを晒け出さねばならない。なのに、お前は素っ裸になっさえ、肝心な部分を隠している。この意味がわかるな？」

わからないはずがない。私は除毛フォームの容器を手に持っているのだ。

「わたしは旦那様の所有物です。お好きなようにしてください」

昌美は、むしろ嬉々とした様子でこたえた。アンダーヘアの喪失も、彼女の望みだったのかもしれない。だが、私の過激なやり方に堪えられるかどうか。

「いい覚悟だな」

私は唇をゆがめてニヤリと笑い、シャツのポケットからライターを取り出した。炎を最大にして点火し、ゆっくりと昌美の股間に近づけた。

「そんな……」

昌美の口から恐怖の喘ぎが漏れた。だが、赦しを乞う言葉は吐かなかった。

まずは、炎の先端で叢をすつと撫でてやる。恥毛がくるくると縮れて、蛋白質の焦げる臭いが鼻をつく。昌美はわずかに腰を動かしたただけだった。

さらにライターを近づけて、瞬間、手を止める。昌美の股間が燃え上がった。

「あ、あっ……」

昌美が呻いた。だが、けっして耐えられない熱さではない。火傷を負う前に燃える物がなくなってしまうのだ。それは、私自身のMプレイで経験済みだ。

「これで、だいたい綺麗になったな」

手拭いを濡らして、焼け跡を拭いてやる。おとなしくしていたご褒美に、割れ目を指で搔き回し、クリトリスもちよつと摘んでやる。

「あん、ん……」

たちまち昌美の呻きが甘い響きを帯びる。が、長くはつづかない。透明なビニール袋を頭からすっぽりとかぶせられて、不安そうな表情になった。首のところが紐で縛って密閉してやると、本気で怯え始めた様子だった。

私は服を脱いで、ブリーフ一枚の姿になった。マゾ雌奴隷の前でご主人様が裸体を晒すのは考え物だが、これからの作業は着衣を汚すおそれがあった。

「せっかく持ってきたんだ。こいつも使ってやろう」

私は除毛フォームを昌美の股間に吹きつけた。だけでなく、全身に塗りたいくった。腕から肩、腋の下、太腿から脛ら脛。全身を白い泡で塗り込めてやった。極薄のゴム手袋をはめた手にフォームを盛り上げ、股間に荒々しく擦り込んでやる。

「んむむ……くうう……」

炎に焼かれた肌に刺激性の薬剤を擦り込まれるのは、さすがに辛いのだろう。ビニール袋を通して呻き声が漏れた。

昌美の顔にかぶせたビニール袋が吐く息で白く曇り、昌美は口を大きく開けて喘ぎ始めた。だが、ビニール袋にふさがれて、自分の吐いた空気できえ満足に吸い込めない。鼻のところにも小さく穴を開けてやると、ひゅうひゅうと音を立てて息を吸い込んだ。私は煙草に火をつけて、昌美の胸が大きく上下に動く様子を鑑賞していた。

頃合いを見計らって、煙草を鼻の穴にねじ込んでやった。昌美は咳込みながら、身によじって苦しむ。咳がおさまるとしばらくは口で息をしているが、ビニール袋の中の空気が濁って息苦しくなるから、煙と一緒に吸い込むのを承知で鼻から外気を吸い込む。そして、またむせる。

数分もそんなことを繰り返しているうちにニコチンに神経を冒されて、膝が砕ける。手首を吊った縄がきしんでも、昌美は苦痛の声をあげなかった。意識も朦朧としているようだ。煙草もフィルターあたりまで短くなってきたことだし、ここらで煙責めは勘弁してやるとしよう。

口にも穴を開けてやり、さらに十分ばかり放置。除毛フォームがすべての毛を溶かすのにじゅうぶんな時間だ。昌美も意識を取り戻した。

まずシャワーでフォームを洗い流してやる。昌美はぴくりと身体を震わせたが、水の

冷たさよりも責めが終わることに安堵しているようだった。だが、ひとつの責めの終わりはつぎの責めの始まりなのだ。

垢擦りのネットがあつたので、それで昌美の身体を強くこすってやる。

「う……」

除毛フォームは無駄毛だけでなく皮膚の表面も溶かす。そこをタオルよりずっと硬いネットでこすられるのだから、痛くないはずがない。

腕から腋の下、胸、背中とこすっていくにつれて、呻き声が大きくなる。そして、いよいよ問題の部分。

「んぐぐ……」

苦痛に耐えかねて、昌美が腰をよじった。

「じつとしている」

タイル壁に押しつけて、さらに強くこする。ライターで焼かれて短くなった毛がぼろぼろと剥げ落ちていき、つるつるの赤肌が表われる。

股間の襜の隅々まで容赦なく抉り、尻の割れ目から太腿、足の甲まで無駄毛をこそぎ落としてやる。仕上にシャワーで洗い流すと、昌美の全身は剥き身の（すこし赤みがか

った）茹で卵さながらになった。股間は色素の沈着が少なく、ピンクとは言わないまでも淡い茶色をしていた。

縄をほどき、ビニール袋を取ってやる。昌美の顔は涙と汗で濡れそぼり、化粧も流れ  
ていた。

「化粧を落としてスツピンで、五分以内に出てこい。もちろん、素っ裸のままだぞ」  
昌美を残して、私はバスルームを出た。

その五分間で、つぎの責めの支度をすませておく。使うのはタコ糸とビニール紐と、  
近郊の農協まで出向いて求めた太い荒縄。それだけだ。デジタルカメラとカッターナイ  
フを出し、昌美のスーツを包んだ紙袋とハンドバッグをスポーツバッグに押し込む。

昌美が全裸で私の前に正座したときには、五分をかなり超過していた。ドライヤーで  
髪を乾かし、きちんと梳いていたようだ。それくらいのことは大目に見てやる。

「どうだ。主人の前にすべてを晒け出した感想は？」

「マゾ牝奴隷にふさわしい身体になれて嬉しいです。でも……」

「ん？」

「なんだか肌が突っ張る感じなんですけど、大丈夫でしょうか？」

「心配ない。肌の脂分が落ちただけだ。とはいえ……しよっちゅう除毛フォームを使っている、かぶれるかもしれない。そのうち、エステで永久脱毛させてやる」

完全なパイパンになるためにエステに通うというだけで、昌美は好奇の目で見られるだろう。しかも、その肌には縄と鞭の痕がびっしり刻み込まれているのだ。同性のエステシャンは昌美の正体を容易に推察して蔑みの眼差しを彼女に向けるだろう。昌美も、そのシーンを想像したに違いない。表情がこわばり、すぐには言葉が出ない。が、私がやると言ったことは必ず実行すると、そろそろわかり始めているようだ。

「ありがとうございます」

両手と頭を床に着けて、こういう状況でマゾ牝奴隷が当然言うべき言葉を口にした。

「そのまま、じっとしている」

私は土下座する昌美に向かってシャッターを切った。

「いやっ！」

ストロボの閃光を浴びて、昌美は跳ね起きた。

「元の姿勢に戻れ」

「お願いです。写真だけは赦してください」

「厭も、赦しても、禁句だと教えなかつたか」

「でも……でも……」

「反抗は許さん。それとも、たつぷり懲罰を受けた身体を晒して外を歩きたいのか？」

昌美は簡単に屈服した。恨めしそうな目で私を見上げてから、深々と土下座する。

私はシャッターを数回切つてから、昌美を正座させた。四つん這いを命じ、立たせて脚を開かせ、そのすべてをたつぷりカメラに収めてやった。

昌美は目に涙さえ浮かべて屈辱的なポーズをとりながら、飾りを失った股間を濡らし  
ていった。

私のほうも、一度欲望を処理しなければどうにもならないほど昂ぶってきた。五十回  
ほどもシャッターを押しまくつてから、昌美を床に組み敷いてまっふたつに折り曲げた。

「ま、待つてください。今日は危険日なんです」

一瞬、子供の顔が目の前にちらついていた。前の妻が離婚後に産んだ、私の息子だ。不思議と、昌美との間に子供ができるかもしれないとは実感が乏しい。

「それが、どうした」

私は昌美を垂直に奥底まで貫いた。



「形ばかりとはいえ籍を入れてやるんだ。出来たら産めばいいさ。女の子を産め。●潮を迎えたら、お前と同じマゾ牝奴隷にしてやる。男だったら……少年趣味のサディストに売り飛ばしてやるかな」

「ひどい……旦那様は、血も涙もない人です」

本心も幾分かはあっただろうが、昌美の言葉遣いはまだ被虐に酔っているマゾ女のそれだった。

「俺は人間じゃない。お前がマゾ牝奴隷なのと同様、俺は血も涙もないサディストだ」

嗚咽を漏らしながら、それでも急速に昇り詰めようとする昌美。私は自分本位に腰を動かし、昌美を追い抜いて欲望を吐き出した。

すぐに抜去して、昌美をバスルームへ追いやった。

「さっさと洗ってこい。オナニーなんかするんじゃないぞ」

今度は三分ほど戻ってきた。中途半端に放り出されて、責めの再開を待ち焦がれているといった感じだった。

昌美をベッドに寝かせて腰に枕をあてがう。脚を開かせると、充血した肉芽が顔をのぞかせている。その根元を、私はタコ糸で縛った。

「痛あい……ああん」

あまり締め過ぎては長時間の責めに耐えられないし、緩くては収縮したときに抜けてしまう。力加減が難しい。無意識に腰を振る昌美を叱りつけ、馬乗りになって押さえ込みながら、どうにか満足できる形になった。

つぎに昌美を立たせて、用意しておいた太い荒縄で腰をくびってやる。前で結んで縄尻を二重に垂らし、長さを調節しながら大きな結び瘤を途中に作った。期待か怯えか、昌美は息を荒げている。荒縄を股間にくぐらせ、襷をくつろげて結び瘤を埋め込み、縄尻を背後に引き上げた。

「ああああっ！」

昌美は爪先立ちになつてのけぞつた。腰縄に絡めて引き絞り、そのまま結び付ける。クリトリスを縛つたタコ糸は、二重になつた荒縄の間を通しておく。

これで服を着せて外へ連れ出すだけでも苛酷な調教だが、乳も虐めてやらなければ不公平というものだ。四つん這いにさせて、ニュートンに逆らう乳房の基底部にビニール紐を巻き付けた。張りのある半球をくびるのは、なかなか難しい。先に輪を作っておいて、鷲掴みにした乳房を思い切り引つ張り伸ばして、片手で輪を絞る。昌美に手伝わせ

ればすこしは簡単になるかもしれないが、それは私のポリシーに反する。マゾ牝奴隷は、あくまでも受け身であるべきなのだ。

何度か失敗しながら双つの乳房をビニール紐でくびり、ゴム鞠のような形に整えた。針で突けば破裂するのではないかと思うほど、ばんばんに張り詰めている。最後に乳首を別々にタコ糸で縛った。タコ糸を引き上げて首の後ろで結び合わせると、乳首は天を向いて固定された。

この格好でポーズをつけさせ、さらに二十枚ほど撮る。ポーズを変えるたびに、昌美は喘いだ。このままの格好で何時間も外を引き回してやれば、いったいどういうことになるか想像すると、息苦しいまでに胸がわくわくする。

ノースリーブのブラウスと黒の超ミニを着せてから、最後の仕上げに取りかかる。両手を前で重ねさせて、親指をタコ糸で括った。ミニスカートのウエストに親指を挟めば、括られているとはわからなくなる。スカートを捲って、荒縄禪から出ているタコ糸を親指に結び付けて、屋外調教の準備は完了。勝手に手を動かそうとすると、最も鋭敏な小器官に激痛（あるい想像を絶する快感）が走るといふわけだ。

私は昌美を姿見の前に立たせた。

「いやあ！」

自分の姿をひと目見るなり、昌美はしゃがみ込んでしまった。それも無理はない。まともに穿いても限界ぎりぎりの超ミニは、腰縄を隠すために引き上げられて尻の肉が見えかけているし、縄のラインもわずかに浮き上がっている。ブラウスも、球形にくびられた乳房と乳首を吊るタコ糸で不自然なシルエツトになっていた。縄もぼんやりと透けて見える。もつとも、たいがいの男は超ミニの半ケツに目を奪われて、他のところには気づかないだろう。そして女からは、とことん蔑みの目で見られる。

「お願いです。部屋の中なら、どんなに厳しいお仕置きでも受けます。でも、こんな格好で外へ出るのだけは赦してください」

昌美が泣きながら訴えた。

「その姿で外へ出るとは言っていないぞ」

昌美は、ほっとした表情になった。

「わざわざそんなことを言うところを見ると、ほんとうはその辛い恥ずかしい格好を大勢に見てもらいたいんだな」

また泣き顔になる。

「いやです。見られたくない。赦してください」

「今の三つの言葉は、それぞれ鞭十発に値する。最初から数えれば、もう百発は軽く超えているな。その姿で半日ほど市中引き回しのうえ、まとめて罰してやる」

「いやです……もう、赦してください」

昌美は泣きじゃくりながら、幼児のようにいやいやと頭を振った。

私は迷った。かわいそうというよりは、昌美に愛想を尽かされるのが怖かった。だが、昌美が何年も希求してきたサディストは、これくらいの懇願に負けて調教を中止するだろうか。

「そんなに厭なら、今日の躰けは無しだ。その格好のまま、お前の家まで送り届けてやる。お前の母親はブティックを経営しているんだったな。最新ファッションで店の宣伝をしてやれ」

ちよつと卑怯だが、昌美が本心から恐れていることで脅迫してやった。母親にこの姿を見られるくらいなら、全裸緊縛姿で繁華街を歩くことも厭わないだろう。

「旦那様は、ほんとうにひどいサディストです」

昌美はまだ嗚咽しながら恨めしそうに私を見上げた。だが、その口調には諦めがにじ

んでいた。不自由な上体を起こし、股縄が食い込むのに顔をしかめながら立ち上がった。涙の跡を拭いてやり、サンダルを穿かせる。昌美が希望した（そして、最初からの計画）通りに、緊縛露出ファッションのまま、外へ連れ出してやった。スポーツバッグは、さすがに私が持つしかなかった。

### 観光バス晒し

ホテルを出ると、まっすぐに元の駅へ向かった。昌美が股間の刺激に耐えながら必死で追いつがってくる気配を背後に感じながら、私は足を速める。横断歩道の信号待ちで立ち止まると、昌美が荒い息を吐きながら追いついてきて、私の背中に隠れるようにぴったりと寄り添った。私は左手を昌美の腋の下にくぐらせて抱き寄せ、乳房を下から軽く揉んでやった。

「あ……」

昌美は半身になって私の肩にもたれかかり、弄ばれている乳房を隠そうとした。皮肉なことに、そのポーズは白昼堂々といちやつくカップルのそれと寸分違わない。露骨な

好奇の視線が、私たちに向けられる。

信号が青になる。私は昌美を突き放して、また早足で歩き始めた。

歩きながら考える。昌美は私を「旦那様」と呼んだ。うまい呼び方だと思った。いくらなんでも、人前で「御主人様」と言わせるわけにはいかない。昌美はともかく、私のほうが恥ずかしい。だが、内と外で呼び方を変えさせるといふのも、休み無しの躰けという方針に反する。しかし「旦那様」なら——そんなに不自然ではない。むしろ、歳のはなれた夫への若妻の照れと、聞いた者は思うのではないだろうか。

昌美の工夫に、私もこたえてやろうと思う。昌美をなんと呼ぶか——考えるまでもなく答えは出ている。「マゾ美」——これしかない。すこし曖昧に発音すれば、「まさみ」あるいは「まつみ」のように聞こえる。しかし昌美としては、自分の正体を大声で暴露されているように感じるだろう。

私は足を止めて振り返り、五メートルほど遅れている昌美に呼びかけた。

「マゾ美、早くおいで」

股間に食い込む荒縄の苦痛と快感に苛まれている昌美は、私の声に気づかない。

「マゾ美！」

はつきりと、大声で呼んだ。昌美が、はつとした様子で立ち止まった。かたくなに顔を伏せて、周囲の目を逃れようとする。信号待ちのときと同じで、その動作がかえって昌美を目立たせる結果となった。

「早く来ないと、おいてくぞ」

私自身、訝しげに振り返る通行人の目に居心地の悪さを感じた。踵を返して、大股に歩き始める。

駅へ戻ると、必要最小限の小道具だけをショルダーバッグに詰め替えて、あとはコインロッカーに預けた。身軽になって、観光バスの乗り場へ向かう。

最初の屋外調教に私が選んだ舞台は、市内半日観光のバスツアーだった。城と神社と水族館を巡るだけの退屈なコースだが、露出の場としてはなかなか面白い。なによりも、観光バス自体が露出に最適の装置だった。二階建てバスだから、運転手もガイド嬢も私たちの行為には気づかない。しかも、運転席の高いトラックからでも、こちらの姿は見えないのだ。ビルからは丸見えだが、一瞬で通り過ぎるから気にすることはない。

私は尻込みする昌美の腕を取って、最前列のシートに座らせた。ネット予約では心許



ないので、指定席の発売日に会社を半日休んで、朝一番で確保しておいたのだ。

隣のシートには、若いカップル。実はこの二人は、SM系のBBSで知り合った仲間だった。本名は知らないが、男はメールでカズオミと名乗っている。SEXの前戯としてのソフトSMしか経験がなく、屋外露出にも興味はあるが、まだ女性のほうがためらっているという——SMサークルの連中に比べたら、ごくかわいいカップルだった。私が最前列のシートを買い占めて、この二人に（若干の見物料を上乗せして）隣席を譲ってやったのだ。これで昌美を窓際に座らせれば、他の乗客の目を完全に遮断できる。

昌美がシートに座ろうとしたとき、私はスカートの裾をつまみ上げて、尻を剥き出しにしてやった。

「あっ……」

昌美はうろたえてバランスを崩し、すっとん尻餅をついた。

「脚……」

膝を揃えようとする昌美を小声で叱る。昌美はためらいがちに脚を二十センチほど開いた。私は昌美の腿をつかんで、私の膝の上に乗せた。超ミニスカートがめくられて鼠頸部まで剥き出しになった。

「いや……」

昌美は私の肩に顔を埋めてつぶやいた。他の乗客に聞こえるのを恐れて、それ以上の声はあげられない。

「マゾ牝奴隷が言っただけにはいけない言葉は、何度も教えたはずだな」

昌美の股間に食い込んだ荒縄をしごいてやる。

「あ……くろう……」

私の肩に押しつけた唇から低い呻きが漏れた。親指に結び付けられたタコ糸を軽く引くと、昌美はのけぞった。が、齒を食いしばって悲鳴をこらえている。

「また禁句を口にしたら、通路側に座らせてブラウスのボタンも外してやるぞ」

二列目の席には、親子四人が並んで座っている。あまり派手なことをすると母親からクレームがつきそうだから、彼らには気づかれないようにするつもりだ。しかし、昌美には私の言葉を疑う根拠も勇気もない。

「もう、二度と言いませんから……」

目にうつすらと涙をにじませながら誓った。

「その言葉を忘れるんじゃないぞ」

私は縦縄から手をはなした。左を振り返ると、SM初心者のカップルが食い入るようにこちらを見つめていた。カズオミ君と目が合ったので、ウインクしてやった。

——定刻になって、バスが動き始める。

「皆様、本日は市内定期観光バスのご利用、ありがとうございます」

ガイド嬢のアナウンスも始まる。バスは数回の信号待ちで駅前ので滞りを抜け出し、幹線道路に乗った。これで、ひとつのビルから長時間見下ろされることなくになった。窓側に座らせているかぎり、素っ裸にしても大丈夫だが——とりあえずは超ミニスカの大股開きでとどめておこう。いきなり極限まで突っ走っては、あとが盛り上がらない。

バスは三十分ほど走って城に着いた。

昌美の服装を直してやり、乗客がいなくなってからバスを降りた。股縄をどこしから、すでに一時間。昌美は蕩けきっていた。一步ごとに膝をかくんかくんと折るようにして歩く。

駐車場のすぐそばにある古い石垣の手前で立ち止まってガイド嬢の説明を聞いている乗客の輪には加わらず、さっさと城へ向かった。数メートル離れて、カズオミ君と彼女

がついてくる。

城の中はご多分にもれず、歴史博物館になっている。最上階までエレベーターで上がつて天守閣からの眺望を楽しんだ後、広い階段を下りながら展示品を見ていくように設定されている。そのルートは無視して、上がり専用の狭い階段へ昌美を追い立てた。

昌美が怯えた表情で振り返る。昔の構造を忠実に再現して、階段の勾配は六十度を超えている。普通のスカートでも、ちよつとためらうところだ。

私は階段に向かって顎をしゃくった。昌美は悲しそうな目で私を振り返り、私の冷たい凝視にはね返される。昌美は悄然と階段を上がり始めた。私は狭い階段で昌美と並んで、腰に手を回した。両手を前で括られていて手すりにつかまれないから、その代わりだった。と同時に、立ち止まらせない為でもあった。

荒縄の大きな瘤に股間を挟られて、昌美は一段上がるごとに喘ぎ声を漏らした。階段を上がるのは、平地を歩く何倍も刺激が強い。苦痛と快感に翻弄されて、超ミニスカートを下から覗かれる心配どころではないようだった。もちろん、後ろにびったりくっついたカズオミ君が目を皿のようにして覗き込んでいるはずだ。

「もう……赦してください」

二階にたどり着いたところで、昌美は音を上げた。腰を抱く私の腕をすり抜けて、床に膝を突いた。カズオミ君の後ろから登ってきた観光客が足を止めて、気遣わしげに覗き込む——ふりをして、昌美の太腿に視線を注いでいる。

昌美の様子から、ここらへんが掛け値無しの限界だと判断した。腋に手を入れて引きずり上げ、気分が悪くなった恋人をいたわる芝居をしながらトイレへ連れていった。女性用のほうに人影がなかったので、そちらへ押し込む。

個室にはいつてロックして、スカートを腰まで捲り上げた。親指のタコ糸をほどき、シオルダーバッグからカッターナイフを取り出して荒縄を切り落とした。荒縄は昌美の分泌液を吸い込んで、ずしりと重くなっていた。タコ糸にくびられたクリトリスは、赤黒く鬱血していた。糸の端を引っ張っても、すぐにはほどけない。

「痛い……あ、くうう」

昌美が悲鳴を押し殺して呻く。トイレの中でクリトリス責めとはスリリングなシチュエーションだが、愉しんでいるわけにもいかない。こういうこともあるのかと用意しておいた爪楊枝を糸の下にくぐらせ、左右にこじって糸の輪を広げた。

タコ糸から解き放たれても、昌美は苦しそうに喘いでいた。

「お願いです。お乳も赦してください」

遠慮がちだが、切迫した声色で訴える昌美。ブラウスの前をはだけると、紫色に変色した乳房が飛び出してきた。このまま放置してどうなるか、私にはわからなかった。まさか組織が壊死するようなことはないだろうが、しかし断言はできない。それに——昌美は受虐への意欲が薄れているように感じられた。おそらく何度もイッて疲れ果てたのだろう。いずれは昌美の意思とは無関係に責めを強制してやるつもりだが、まだ半人前未満のマゾ牝奴隷だ。今日のところは甘やかしてやる。

私は黙って乳首のタコ糸をほどき、乳房に巻き付けたビニール紐も切った。

昌美は乳房と股間を手で押さえうずくまった。痺れた足で立ち上がったときと同じような疼きに襲われているのだろう。しかも性感が密集している部分だ。その感覚は、男の私には想像もできない。

「バスで待っているぞ。落ちついたら戻ってこい」

責めを中断したことで、なんとなく氣勢をそがれてしまった。荒縄も床に打ちちゃったままにして、個室を出た。入口で五十絡みの婦人と鉢合わせしたが、ちよつと会釈して堂々とすれ違う。昌美が慌ててドアを閉める音が背後で聞こえた。

バスに歩いて戻りながら、これからの責めを考えた。飲み物を無理強いに飲ませて尿意に悶える様を愉しむつもりだったのが、手を自由にしてやっついては面白くない。やはり露出を中心に組み立てることにしよう。あるいは、昌美は本気で抵抗するかもしれないが、それはそれでかまわない。夕方から予約を入れてあるSM専用ルームで、たっぷり罪を償わせてやる。

——十五分ほどで昌美は戻ってきた。

「わがままを言つて済みませんでした」

昌美は自分でスカートの裾を持ち上げ、尻を剥き出しにしてシートに座り、思いきりよく脚を開いた。私の機嫌を損ねまいとして、言い付けを忠実に守っている。そんな昌美を見ていると、愛しさと同時に嗜虐の欲望が股間を疼かせる。

「謝る必要はない」

言いながら、ブラウスのボタンを全部はずしてやった。バスの発車まで、まだ時間がある。二階には誰もいなかった。

「犯した罪は、お前の身体で償わせてやる」

乳首すれすれまで胸をはだけて、ブラウスの裾をヘソの上で結んでやった。

「これは罰じゃないぞ。淫乱なマゾ牝奴隷にふさわしい服装にしてやったんだ。これからは、自分で着こなしを考えろ」

「はい。ありがとうございます」

青ざめていた顔が、また被虐のピンク色に染まった。

屋外調教の第二幕は神社だった。広い敷地に複数の神殿が散在しているので、露出の場所には事欠かない。

バスが止まると、いやがる昌美の腕を引っ張って、まっ先に席を立たせた。半裸も同然の服装を他の乗客にもたっぷり見てもらいながら、狭い通路を後ろから追い立てた。

バスから降りると、ここでもガイド嬢の案内を無視して、ひと気のない場所へ昌美を追い立てた。カズオミ君と連れれの女も、十メートルほど離れてついてきている。

「疲れたな。しばらく休もう」

神殿の裏手にある芝生に昌美を誘い込み、脚を投げ出して座らせた。超ミニスカートは自然に捲れて、尻がじかに芝生に当たった。脚を開かせて、勝手に閉じないようにシヨルダーバッグを置いておく。



私は芝生に寝転がって、剥き出しの太腿に頭を乗せた。草の先がくすぐったいのか、昌美は腰をもじつかせる。

「じっとしている」

ぴしゃんと尻を叩いてやった。

昌美が開脚している正面には生け垣があり、その手前にベンチが置いてある。そこへカズオミ君たちが来て座った。昌美が脚を閉じようとする気配を感じて、私はもう一度尻を叩いた。

「勝手な真似をするな」

「でも、人が……」

「主人の命令を聞けないのか！」

私は跳ね起きて大声で叱った。昌美は、びくつと肩をすくめた。

「ちよつと躡けてやる。歯を食いしばれ」

「でも……」

抗議しかける昌美の頬に平手を叩きつけた。

パン！

静かな境内に乾いた音が訝した。二発、三発と往復ビンタを張った。昌美の顔が左右に吹っ飛ぶ。

どんなときでも躡けてほしいと言ったくせに、人前でお仕置きされるとは思っていなかったのだろうか。昌美は私を見上げて呆然としていた。

「主人の命令には絶対服従だということを、あらためて教えてやる」  
ブラウスの裾をほどき、問答無用で剥ぎ取った。

「手は頭の後ろで組んでいろ」

今度は逆らわなかった。ぽかんとした表情のまま、半裸を晒け出すポーズをとった。私は膝枕の上にゆっくりと身体を倒した。昌美は思考停止に陥っているようだ。しばらくすれば判断力が戻ってくる。そのときの羞恥に身悶える表情を見ることができないのは残念だった。

ひと気がないといっても、観光名所になっている神社の片隅だ。いつ何時、道に迷った参拝客がやって来ないとも限らない。それをいちばん気にしているのは、実はカズオミ君だったかもしれない。昌美の乳房に目を吸い寄せられながら、ちらちらと周囲に視線を走らせている。女のほうは、無表情に昌美を見つめている。彼女の心の中に動いて

いる感情は、自分もそんなふうにされるかもしれないという不安だろうか、そんなふうにされてみたいという羨望だろうか。

不意にカズオミ君が立ち上がった。女の腕を引っ張って、私たちに近づいてくる。とくにシナリオは打ち合わせていないが、好きなように絡んでくれていいと、あらかじめ言つてある。カズオミ君のお手並み拝見といこうか。

「あのう……いきなりで失礼ですけど、それって露出プレイですよね？」

「いいや、プレイなんかじゃないよ」

私は上体を起こした。昌美が胸を隠していたので、ビンタをくれてやる。

「勝手な真似をするな！」

カズオミ君に向き直つて言葉をつづける。

「プレイというのはお遊びでしょう。こいつは正真正銘のマゾ牝だから、そんなのは厭だと言うんですね。こいつが望むのは躰け、調教、懲罰、そして拷問。今は人前でも主人の命令に絶対服従する躰けの最中ですよ」

「ほんとですか？」

本気で疑っている口振りだった。

「本人にきいてみますか」

私は昌美に、立って検査の姿勢を取るように命じた。かなり抵抗するだろうと思つていたのだが、昌美は素直に立ち上がって両手を頭の後ろに組み、脚を五十センチばかり開いた。かえつて、こちらが気圧されるほどだった。

「この人に自分の立場を説明して差し上げろ」

「マゾ美は……旦那様のマゾ牝奴隷です」

小さな声だったが、昌美は自分のことを「マゾ美」と名乗った。

「どんな命令にでも服従いたします。旦那様が厳しく躰けてくださるときが、マゾ美の一番の幸せです」

全身を紅潮させて膝を震わせながら、しかしはつきりと言い切った。

「ふうん。それじゃ、鞭でぶたれたりするのが好きなわけ？」

カズオミ君の彼女が、意地悪く質問した。

「はい」

昌美はためらうことなく答える。

「それじゃ、あたしがぶつてあげようか？」

昌美は、今度は無言だった。昌美の主人として、私が同意を与える。

「それは面白い。マゾ美、この人に虐めてもらえ」

「はい……」

昌美は悲しそうな顔になって、それでも健気に私の命令に従った。

芝生の先は広い林になっている。その中へ昌美を連れていき、申し訳に腰を覆っている超ミニスカートも脱がせた。きれいに除毛された昌美の股間にふたりの視線が吸い寄せられる。私は昌美を樹に抱きつかせて、後ろ向きに縛り付けた。

鞭は持ってきてなかったの、木の枝で代用することにした。細くしなやかな枝を選んで折り、余分な葉を取ってから女に手渡した。

「手加減なんかしないでいいからね。好きなどころを思いきり叩いてごらん」

女は枝の鞭を握ると、目を輝かせながら昌美の後ろに立った。

「えい！」

かわいい掛け声もろとも、枝を尻に叩きつけた。

パン！

音もかわいい。昌美はぴくりとも動かず、打擲を受け流した。昌美が平然としている

のに腹を立てたのか、女はむきになって枝を振り回した。だが結果は同じだった。腕を力いっぱい振っているのだが、スイングのスピードが乗らないうちに当てているし、手首のスナップも利いていない。五発も鞭打つと、女は枝を放り出した。

「なによ、こいつ。マゾっていうより、鈍感なだけじゃないの」  
肩で息をしながら吐き捨てる。

この世に二つとない宝石にケチをつけられて、私は向つ腹を立てた。枝を拾い上げて素振りをくれた。枝は空気を切り裂いて鋭く鳴った。

「打ち方が悪いんだよ、お嬢さん。ゴルフでもテニスでも、やたらと力を入れればいいってもんじゃないだろう」

言いながら、スナップを利かせた一撃を昌美の尻に打ち込んだ。

「痛い！」

昌美が大げさに叫んだ。安心して悲鳴をあげている。女に打たれたときには意地でもこたえていないふりをしていたのとは対照的だった。いじらしいと言え、いじらしい。だが、主人に恥をかかせたと考えることもできる。

私は枝を跳ね上げて、尻の谷間を痛撃してやった。

「ぎゃんっ！」

昌美は獣じみた悲鳴をあげた。ごつごつした樹の幹に肌を擦りつけて悶える。

「それに、打つのは尻だけと決まっているわけじゃない」

私が振り向くと、女は怯えた表情で後ずさった。

「そこまでやるなんて……あたしは厭！」

くるりと背中を向けると、林の外へ駆け出していった。自分が鞭打たれるシーンを頭に描いて、恐怖を感じたのかもしれない。

「キミちゃん……」

カズオミ君があわてて追いかける。

「初心者には刺激が強すぎたかな」

私は苦笑しながら昌美の縄をほどいてやった。

昌美がもの問いたげに私を見上げる。私の口調から、何ごとかを感じいたようだ。だが、自分からたずねようとはしなかった。マゾ牝奴隷はご主人様に一切を委ねて、羞恥と苦痛と快感にのたうっていれればいいのだ。

そういう意味では、サディストは奉仕者と言えなくもない。

しかし、それにしても。露出的な服を着ることにあれほど抵抗した昌美が、さつきは見事に恥知らずなマゾ牝奴隷として振る舞った。これは、どういうことだろう。馴れてきた、羞恥心が麻痺してきたのだろうか。しかし、変わりようが急すぎる。あるいは——マゾ牝奴隷らしく振る舞わないと私に恥をかかせることになると考えたのだろうか。つぎは、このツアーの目玉になっていく水族館だ。そこでたしかめてやろう。

自分でブラウスを大きくはだけて裾を結んでいる昌美の仕種を見守りながら、私は頭の中で調教の手順を考え直していた。

——バスにはカズオミ君たちが先に戻っていた。カズオミ君はズボンを下ろして、跪いたキミちゃんにフェラチオをさせている最中だった。私たちに気づいてキミちゃんが逃れようとしたが、カズオミ君は頭を押さえ付けて続きを強制する。私と目が合うと、お返しだと言わんばかりにニヤリと笑いかけてきた。これで、さっきのひと幕が仕組まれたものだったと昌美に確信させてしまっただろう。

昌美が、ちらつと私の顔を見た。自分もフェラチオ奉仕を命じられるのではないかと、不安と期待の入り交じった表情だった。

「もの欲しそうな顔をするな。おとなしく座っている」



四十歳も目前になると、一日にそう何発も射てるものではない。

昌美は黙ってスカート裾を持ち上げ尻を剥き出しにして、窓際に座った。脚を直角に開いて、上気させた顔をうつむける。中途半端に責められ、他人の痴態を見せつけられて、全身に満ちあふれた被虐願望を持って余している風情だった。

(すこしは愉しませてやるか)

私はショルダーバッグからツインローターを取り出した。バイブの中ではいちばん小さな卵形のやつだが、二連になっている。リモコンボックスには電池が四本入るから、普通のピンクローターよりは振動が強い。

ローターのひとつを前の穴へあてがった。

「あ……ん」

ローターはつるりと呑み込まれた。

「腰を上げろ」

それを引き抜いてアヌスに押し付ける。今度は、なかなか入らなかった。

「ケツの力を抜け。こないだは俺のチンポを楽々と啜えたじゃないか」

「はああ……」

昌美が大きく息を吐いた。と同時に、ローターは昌美の中へ押し込まれた。

スカートの中を通してリモコンボックスを背中から出し、私のズボンのポケットへ入れた。だが、スイッチは入れない。自分の体内で凶暴な卵が暴れだす瞬間を待つて緊張している昌美の表情をたっぷり鑑賞する。

射精までいったらしく、カズオミ君はズボンを元に戻して、こちらの様子をじつと見つめていた。口をすすぎにでも行ったのか、キミちゃんの姿は消えていた。

昌美とカズオミ君の期待を裏切って申し訳ないが、私はポケットの中のリモコンボックスを握ったまま、スイッチは入れないでバスの発射時刻を待った。

——バスが走り始めてから、私はリモコンボックスのスイッチを入れた。前へ入れたほうのスライドを、いきなり最強まで持っていった。

「……………！」

昌美の背中がぴくんと反った。アナルのリモコンも最強にする。

「……………んん」

昌美の上半体がぐらりと揺れて、私の肩に顔をうずめた。歯を食いしばって声を噛み殺している。

スライドをゆっくり戻してやると、それにつれて昌美の身体から力が抜けていく。前のほうを最強にすると、昌美は腰をいっぱいに引きながら私にしがみついていた。前を弱めながら後を最強にすると、尻がじわっと浮き上がる。スライドを動かすたびに、昌美の身体が微妙に蠢く。息がだんだん荒くなっていく。

「もう……止めて……ください」

肩に顔をうずめたまま、昌美が囁き声で哀願した。

「……イッちやいます。声が……出、出るから……」

たまにはマゾ牝奴隷の願いをかなえてやろう。私は黙ってスイッチを切った。

昌美は私にしがみついたまま、ほうつとため息をついた。そして、恨めしそうに私を見上げる。頂点の寸前まで追いつけられていたのだ。こうなると、他人に見られようが聞かれようが、どうでもいい。最後の最後までとどめを刺してほしかったというのが、昌美の本心だろう。もちろん、それをわかっていて私はスイッチを切ったのだ。

「自分で持っている」

リモコンボックスを昌美に渡してやった。イキたければ自分でスイッチを入れろという意味だが、まさか、そんな恥知らずな真似もできまい。もちろん、スイッチを入れた

が最後、主人に断わりなく勝手な振る舞いしたかどで厳罰が待っている。

そこまで深読みしていたかどうか——ともかく、昌美はリモコンボックスを背中に隠したまま、触ろうともしなかった。

——バスが水族館に着いて、乗客が動き始める。今度は最後に降りるつもりだったが、カズオミ君たちも席を立とうとしない。

(まあ、見られて困るわけでもなし)

私は昌美に立つように言った。昌美が立ち上がった瞬間、股間に手を差し込んでコードを無造作に引っ張った。

ぬぽん。

淫らかな音を立てて、前の穴からローターが抜け落ちた。

「いやあ！」

昌美が泣き声をあげた。

「力を入れるな」

尻をぴしゃんと叩いて後ろの穴から伸びているコードを強く引くと、昌美は二つ目の

卵を産み落とすした。ピンク色の卵の表面には、茶色い泡のような汚れが付着していた。

「ケツの中はクソだらけらしいな」

ティッシュでローターを拭きながら、言葉で罵る。

「お仕置きの前には、たっぷり浣腸をする必要があるそうだ」

昌美は顔をおおって泣きじやくり始めた。ちよつと意外だったが、この場にふさわしい反応でもあった。バスが走っているうちに醒めていたのか、あるいは半ば演技なのか。

「めそめそするんじゃない。汚れたケツを拭いてやる」

カズオミ君たちの目の前で、昌美を肘掛けに押し付けた。スカートを捲るまでもなく、尻が丸出しになった。昌美はしゃくり上げながら、されるがままになっている。

アナルをティッシュで拭きながら、スカートの裏側がぬめぬめと光っているのに気づいた。ビニールレザーの生地は、昌美のこぼした汁をまったく吸い込んでいなかったのだ。そちらも拭き取ってやる。汁の溢れ出す源は、すでに乾いていた。

バスを四人で降りると、他の客の姿はもう見えなかった。運転手だけが、ぶすつとした顔つきで待っていた。

「皆さん、先に行きましたよ。これが水族館の入場券」

私とカズオミ君に二枚ずつ渡しながら、運転手は昌美の超露出的な服装を不快そうに睨みつけていた。私たちのしていることをおおよそは感づいている気配だった。

(観光ツアーを切り上げる潮時かな)

この後は車窓からの観光をしながらターミナルに戻るだけだ。小便の躰けは中止したのだから、長時間バスに乗せる意味はなくなった。さっさとタクシーで戻って、本格的な責めに取りかかったほうが愉しめる。

本日最後の野外調教だから、すこし過激に辱めてやることにしよう。

ここの水族館は日本でも屈指の規模を誇っていて、館内も広く展示物も多い。じっくり見学すると、丸一日かけても足りないぐらいだ。だが、人込みの中での露出に適したスポットとなると、さすがに限られてくる。

そのひとつがガラスドームだ。扁平な半球形のドームが巨大な水槽の底に沈められていて、その中から泳いでいる魚を観察する仕組みになっている。ドームへは、エレベーターで下りたあと地下通路を通り、階段を上がってたどり着く。ドームの床は平坦で、ガラス壁に沿ってとどころにベンチが置かれているのだが、床に座り込んだり、寝転んで天井を泳ぐ魚を眺めている見物客も少なくない。

そういつた見物客のあいだを縫って、私はドームの中央まで歩いていった。外周部を見ている見物客の背中に遮られて眺めはよくないが、裏返せば大半の見物客からは死角になつていふということだ。といつても、誰からも見えないというわけでもない。

私が床に座ると、昌美も仕方なく隣りに腰を下ろした。仄暗いドームの中で、水槽から差し込む青い光が、剥き出しになつた昌美の尻を白く浮き上がらせた。脚を五十センチほど開かせ、両手は後ろにつかせる。上向きに晒け出された腹の上で青い光が揺れる。

昌美はドームの天井を見上げ、そこに泳ぐ魚群に心を奪われて、ついうっかりしどけないポーズになつてゐる振りを装つていた。私も湾曲したガラス壁に顔を向けながら、こつそりと周囲の様子をうかがつた。

隣で寝転んでゐる高校生らしい男女三人は、何も気づかずにガラスの天井を見上げてゐる。反対側には二十代のカップル。他人のことには無関心らしい。その向こうに七、八人の一団が立っている。年齢構成がばらばらなところをみると、ツアー客だろうか。中年の男三人が、昌美の放胆な姿態にちらちらと視線を投げかけていた。通り過ぎる魚群の動きに合わせて首をひねると、斜め後ろに陣取つてゐるカズオミ君とキミちゃんの

姿が見えた。二人は、もちろん私たちの一挙一動を食い入るように見つめている。その視線に誘われるように、数人の目がこちらに向いていた。

観客はじゅうぶん。

私は昌美の肩を抱き寄せた。昌美は身体を硬くして、つぎになにをされるのかと怯えている。

(期待にこたえてやるよ)

昌美の肩をがちりと押さえ込んで、もう一方の手で左の胸を軽く撫でてやった。ボタンの掛かかっていないブラウスは簡単にずれて、片方の乳房がこぼれ出た。

昌美は身をもがいたが、私は肩を抱く手にますます力をいれながら、ブラウスの右側もはだけてやった。

昌美は床に突いていた手を放して胸を庇おうとしたが、上体を反り返らせた姿勢でそんな動きをすればバランスを崩すに決まっている。私が腕の力を弛めると、どさりと音を立てて仰向けに倒れてしまった。

「きゃあ！」

昌美の無防備な悲鳴が、周囲の注意を引きつけた。



「うわあ、凄げえ」

高校生が素っ頓狂な声で叫んで昌美を指差した。ドームにいた全員の視線が昌美に集中した。

「おい、あれ……」

「やだ。なに？」

海の底のように静かだったドームの中に、さざ波が広がっていく。昌美を羞恥にのたうちまわらせるには最高の環境だが、カッターシャツに腕章を巻いた男がパイプ椅子から立ち上がるのが目に入っては、そんなことも言っていない。

「だから、そんな格好はよせて言ったじゃないか」

取り繕う台詞を吐きながら、ブラウスの前を掻き合わせてやる。手を引つ張って立たせて、階段へ向かった。腕章を巻いた職員は、まだ状況を把握していなかったらしい。私たちとすれ違つて、そのままドームの中央へ向かつて行つた。

水族館の外へ出るまで、私は昌美を振り返らなかつた。あれしきのことと狼狽しているようでは、主人の威厳もあつたもんじやない。たとえ警官に見咎められても、SMPプレイだと説明すれば（路上で素っ裸にでもさせていない限りは）お叱りのひとつくらい

で済むと——腹を括っていたつもりだったのに。いざとなると、不様この上ない。昌美を躡けるのと同時に、私自身もマゾ牝奴隷の主人としての風格を身に着けねばならない。が、それは私自身の胸の内にしまつておく。マゾ牝奴隷に言ったところで、どうなるものでもない。ますます失望させるだけだ。

私はタクシーに昌美を押し込んで、出発地の駅へ戻った。

### 苛酷な躡け

タクシーが駅に着くまでには私の動揺も治まっていた。自分への腹立たしさが昌美への怒りに変わってくる。あれくらいのことでは悲鳴をあげるのが、そもそもマゾ牝奴隷としての自覚に欠けている。心の底から反省するまで徹底的に懲罰を与えてやり、そのあとで私自身の愉しみのために残酷な折檻をしてやる。途中で音を上げようものなら、よりハードな責めの特訓だ。最後まで耐え抜けたら、褒美としてさらに厳しく責めてやる。半袖のスーツでは隠しきれなくなるまで、全身に鞭と縄の痕を刻み込んでやる。

というのは——本当の本心ではない。どんなに理不尽な理屈で苛酷な懲罰を与えよう

とも、それは調教でなくてはならない。ペットを躰けたことのある者なら、容易に理解してくれると思う。

最初から私は、昌美を（彼女自身が思っているそれではなく、私が観察して決める）限界ぎりぎりまで追い込むつもりでいた。とはいえ、今日の気分では限界を少しだけ超えさせるかもしれない。

タクシーから降りると、昌美の歩く速さを気遣ってやることなく、大股にコインロッカーのコーナーへ行く。スポーツバッグを取り出して、今度は自分で持った。この中には昌美の服とハンドバッグが入っている。これを返してやらないかぎり、昌美は逃げたくても逃げられない。

私は先に立って、朝方に行ったホテル街へ向かった。昌美はいつの間にかブラウスの裾をほだいてきちんとボタンを掛けていたが、今は咎めている余裕が私にはなかった。昌美を素っ裸にして縛りあげて柔肌を針を突き刺し鞭を叩きつけ、涙と悲鳴を絞り出してやりたい思いが私を駆り立てていた。

朝はいい加減に選んだホテルだったが、今度はそうはいかない。責めに必要な小道具は一式持参しているが、それなりに舞台も必要だ。本格的なS Mルームとなると数は限

られているし、ふさがっていることも少なくない。だから、前もって予約しておいた。先客に時間延長されてはたまらないし、場合によってはオールナイトで昌美をいたぶるかもしれないから、バスツアーが終わる二時間前から翌朝まで押さえてある。

そのホテルへ直行して、支払い窓口へ回ってキーを受け取る。そして、エレベーターの手前で足を止めて昌美を振り返った。

怯えた表情で立ち止まる昌美。私は両手をブラウスに掛けて、一気に引き裂いた。

「いやあ！」

胸を庇ってうずくまろうとする昌美を壁ぎわに押さえつけて、残りの生地を筆り取った。両腕を背後にねじ上げて手首をまとめて片手をつかみ、エレベーターの前に立たせる。昌美はうつむいて、されるがままになっていた。

エレベーターの扉が開く。

「ええっ……！」

昌美の口から、悲鳴ではなく驚きの声が出た。

「おやおや」

私は苦笑した。エレベーターには先客がいたのだ。逆海老に縛られた青年が、股間を

正面に向けて床に転がっていた。赤黒く膨らんだ亀頭のまわりに洗濯バサミが幾つも咬みついて、大輪の花が咲いているみたいだった。

青年は昌美の裸体を見て、ほっとしたようだった。同じ仲間というわけだ。だが私は視線を合わそうとしなかった。

私としても、他人のプレイにかかずらう気分にはなれない。尻込みする昌美をエレベーターに押し込んで、行き先階のボタンを押した。ついでに、そこから最上階までのボタンを全部押しておいた。

「ちよつとした意地悪——いや、親切かな？」

青年は答えなかった。

エレベーターが止まるまで、昌美は無言で正面を見つめていた。いずれは（あるいは今日にでも）自分も同じ目にあわされるのではないかと、内心では怯えながら期待していたはずだ。三階で降りると廊下でミニスカートも剥ぎ取ってやったが、今度は狼狽する様子もなかった。

全裸の昌美を引き立てて、S Mルームに入る。礫台や木馬、天井から吊された滑車と壁際の檻。そういった道具立てを目にして、昌美は立ちすくんだ。

私は昌美を部屋の中央に突き飛ばして、その前に仁王立ちになった。

「お前には失望したぞ。遅刻して主人を待たせて、しかも服装違反ときた。命令にはいちいち反抗するし、大袈裟な悲鳴をあげる。今日は徹底的に躰け直してやるから覚悟しろ」

昌美は一瞬私を見上げ、それから土下座した。

「申し訳ありませんでした。旦那様のお気に召すようにマゾ美を厳しく躰けてください」  
それまでの中途半端な態度が嘘のように、昌美は従順なマゾ牝奴隷に変貌した。こうしてみると、昌美は被虐願望を上回って羞恥心が強いのもかもしれない。彼女にとって躰けとは、人前で痴態を晒すことではなく、密室での肉体への過酷な責めを意味しているのだろう。昌美の望みが理解できたからといって、屋外調教を手加減してやるつもりはない。だが今は——昌美の望みを存分になえてやるとしよう。

「ひとつだけ、お願いがあります」

平伏したまま、昌美が言った。

「わたしは旦那様から見れば半人前以下の、こらえ性のないマゾ女です。躰けの途中でお赦しを願うかもしれません。でも、けっして手加減しないで、最後まで躰けてくださ

い

「当然だ。この場におよんで、主人にあれこれ指図するんじゃない」

とは言ったものの。今日はすこし甘やかしたかなと、内心で反省した。縄禪とタコ糸を外すのが早かったかもしれない。ツインローターは、もっとしつこく虐めてやればよかった。

私は昌美を立たせて、両端に革手錠のついた金属パイプを背負わせた。こういう小道具が揃っているから、SM専用ルームは便利だ。腕を水平に拘束して、滑車でパイプを吊り上げる。片脚を真横に引き上げて別の金属手錠でパイプにつなぎ、さらに滑車を引き上げる。昌美は片脚で爪先立ちになって、バレエを踊っているような姿になった。

不安定な姿勢でゆらゆらと揺れている昌美の目の前で私は服を脱ぎ、ブリーフ一枚になった。昌美を得てからとみに狂暴になってきた息子を、今のうちにたっぷりと見せつけてやるためだった。スポーツバッグを開けて鞭を取り出すと、昌美の表情がこわばった。無理もない。私が手にしているのは、長さが二メートル近くある一本鞭なのだ。非力な女が振るっても、やわなマゾ男だったら泣きを入れてしまう。それを、男の私が本気で女の肌に叩きつけるのだ。どれほどの苦痛が炸裂するか、昌美には想像もつくまい。

鞭に素振りをくると、空気が不気味に唸る。床を叩くと、重い打撃音が部屋に鈞する。その様をたっぷり見せつけておいてから、アイマスクで視界を奪う。どこを打たれるかわからなければ、恐怖と苦痛は倍加する。

「さて、どういうふうにしてやるかな」

すでに妖しくぬめっている股間に鞭の柄を抉り入れながら、昌美の反応をうかがう。

「外国では鞭打ちの刑で命を落とす者もいるくらいだから、十発単位というわけにもいくまい。そうだな……遅刻の罰としては三発でいいかな」

不自由な姿勢で鞭の柄を受け入れながら、昌美は細く喘ぎ始めている。

「服装違反にも三発。ブティックで逆らったのも三発。縄褌に耐えられなかったから、ここを鍛える意味で五発。その他の不服従には五発。水族館で騒ぎを起こしたのは重罰に値するから十発。さあ、全部で幾つだ？」

鞭の柄をぐいと突き上げる。

「ひっ……わかりません」

「簡単な足し算もできないのか。答えられなかった罰も合わせて、全部で三十にするぞ。

文句はないな」



「はい。マゾ美に三十発の鞭をください」

「ちゃんと数えるんだぞ。間違えたら、最初から数え直させるからな」

私は鞭の柄を引き抜いて、昌美の正面に立った。鞭を構えて、しかしすぐには打たない。全身の筋肉を緊張させて鞭を待ち受けている昌美がほっと息を吐いた瞬間をとらえて、横殴りに鞭を振るった。

ほとんど真上まで片脚を吊り上げられてぱっくりと開いた無毛地帯の中心に、鞭の先端が食い込んだ。

「ぎゃんっ！」

昌美は背中を反り返らせて、断末魔の犬が吠えるような声を迸らせた。

二発目は太腿、三発目は乳房を狙った。ずしんと重い鞭の音と昌美の濁った悲鳴が凄絶なハーモニーを奏でる。昌美の肉体には、早くも三条の赤く太い線が刻み込まれた。

「どうした。数えないのか」

「あ……みつつ……」

「駄目だ。ちゃんと一発ずつ数えるんだ。やり直し」

昌美は声を頼りに私のほうへ顔を向けた。アイマスクの裏側では、さぞ恨めしそうな

目をしていることだろう。

「今度は、ちゃんと数えろ」

昌美の背後にまわって尻に鞭を叩きつけた。

「ひとつっ！」

悲鳴混じりの声で、昌美が数える。

「ふたつ、みつつ……」

肉を抉る鞭音に、昌美のソプラノが交錯する。

五発の鞭で尻を真っ赤に染めあげてから、私は昌美の正面に戻った。爪先立った片脚すれすれに鞭を跳ね上げる。

「ぎゃんっ……む、むつつ」

半歩下がって鞭の先端で左右の乳首を水平に薙ぎ払い、ぐっと踏み込んで鞭の根元まで乳房に叩きつける。

八発目はくびれたウエストに鞭を巻き付けて強く手前に引っ張った。独楽のようにくるくると回り始めた裸身に、ろくに狙いも定めずに嵐のような連打を浴びせる。

「こここのっ！　とう！　じゅういち、じゅうに……じゅうさんん」

泣き崩れながら、それでも昌美は懸命に、おのれの身体に刻まれてゆく鞭を数えていく。

二十を数えたところで、私は手を休めて煙草を啜えた。

「なかなか頑張るな」

赤青紫の斑模様 に埋まった乳房に煙草の灰を落としながら、片手で股間を優しく苛めてやる。

「くうう……」

昌美は、苦痛とも快感ともつかぬ呻き声を漏らした。

「つぎの五発は、縄褌に負けないように、ここを鍛えてやるからな」

「はい……ぎゃあ！」

悲鳴は、胸の谷間に押し付けられた煙草のせいだった。ただし、深い火傷をしないように手加減はしてある。

灰皿であらためて煙草を消して、私は再び鞭をかまえた。予告抜きで鞭を跳ね上げる。

「ぎゃんっ……にじゅういち！」

鞭の先端は股間を抉りクリトリスを嚙り取りながら宙に舞った。そのまま風車のよう

に鞭を回転させて一步前へ出る。

「ううっ……にじゅうに」

鞭は尻の奥まで食い込んだ。鞭を引き、息継ぐ暇も与えずに次の打撃を送り込む。

「にじゅうさん……もう、いやあ！」

昌美は激しく泣き叫んだ。

「お願い、もう……そこは、ぶたないで」

哀願を無視して、私は二十四発目を繰り出した。

「いや、いやあ！」

昌美は髪を振り乱し、腰を左右に振りたてて、鞭から逃れようとした。

私はさらに三発を加えてから、手を止めた。髪を鷲掴みにして顔を上向かせ、アイマスクを筆記取る。アイマスクに堰き止められていた夥しい涙が、どつと昌美の顔に広がった。

「ちゃんと数えなかったな」

昌美の表情が凍りついた。

「あ……でも……」

「あと三十発だ」

絶望に歪む昌美の顔を見つめて、私はサディストの醍醐味に陶然となりながら、新たな刑罰を宣告した。しかし、頭の片隅では——本気でこのうえ三十発も鞭打って、果たして大丈夫なのかと、心配もしていた。

「お願いです。もう、赦してください。あの……たしか、鞭は二十七です。ちゃんと数えてました。あと三つ……あと三つだけは我慢します。だから……」

なんとかして追加の鞭打ちを赦してもらおうとして、昌美は必死に言いつのる。今の昌美は被虐に溺れるマゾ女ではなく、暴力に怯えるか弱い女性でしかなかった。さきを感じた不安もあいまって——いっそ、昌美の懇願を聞き容れてやろうかとも思った。

しかし。それは結局、昌美を失望させることになるのではなからうか。自分の意思には関係なく、絶対の権威を持つ主人に支配され服従を強制され一方的に蹂躪されて、苦痛と屈辱にのたうち回ることこそが、マゾヒストの真の願望ではなかったか。

「最初に、お前はなんと言った？」

私は冷酷な声音を作りながら、昌美の瞳を覗き込んだ。

「途中で音を上げても手加減せずに最後まで責めてほしいと望んだのは、お前自身だぞ。」

あと三つは我慢できると言ったな。それでは、あと三十三発だ。今度こそ、間違えずに数えるんだぞ」

昌美は潤んだ瞳で私を見上げた。

「……はい」

赦しを乞えば乞うほど罰が重くなると悟ったのか、昌美は涙声でさらなる責めを承諾した。

私は昌美の視界を、再びアイマスクで閉ざした。

「いくぞ！」

声と同時に鞭を飛ばした。

「ひとつ……ふたつ……みつつ」

昌美は淡々と鞭を数えていく。悲鳴が混じらないのは、やはり私が手加減をしているからだ。マゾヒストとしてもハードな責めを望む、この私でも、三十発の一本鞭は相当に辛い。すでに二十七発、男の私が本気でマゾ牝初心者の昌美を打ち据えている。いくら昌美の被虐願望が深くても、とつくに（昌美自身が自覚する）限界は越えているはずだ。どうしても、鞭を振るう腕に力はいらない。主人として言ったことは必ず実行し

なければならぬという義務感さえ感じながら、私は昌美を鞭打っていた。もちろん、声に混じる嗚咽や苦悶が楽しくないわけではないのだが。

「じゅうしち、じゅうはち……お願い、すこし休ませてください」

またしても、昌美が泣きを入れた。私は、ふと疑問を感じた。さきの二十七発に比べれば、今度はずいぶんと甘くしている。これくらい鞭打ちを、昌美が耐えられないはずがないのだが。いったん限界を越えた後だけに、苦痛しか感じていないのだろうか。

——マゾヒストでも、痛いものは痛い。苦痛を感じる神経と快感を感じる神経は同じだとか、あれこれ言われているが、普通の人間が苦痛を感じる刺激は、マゾヒストにとっても苦痛に変わりはない。虐められて快感を覚えるのは、性的な対象として見ている相手から虐待されるといふ、そのシチュエーションそのものに感情移入しているからなのだ。だから、ほんとうに心の底から嫌っている男に、たとえば職場などで平手打ちを食えば、どんなマゾ女でも屈辱と怒りを感じるだけで、絶対に被虐の快感にはつながらない。あとで思い返して、その男に征服されてみたいなどと考えるようになれば、それはその時のことだが。

だから。虐められたいという願望が消え失せてしまえば、鞭打ちには耐えられない。

今の昌美は、その状態にあるのだろうか。しかし——それにしても、ちよつと不自然だ。

「痛い……ちよつとだけ、待ってください」

昌美はつぎの二発を数えなかつた。本当に鞭打ちから逃れたいのなら、新たな罰を追加されないように、ともかくも数えつづけながら、赦しを乞うはずだ。

(もしかしたら……)

私は鞭を捨てて昌美に歩み寄つた。アイマスクを外すと、果たして、怯えと期待のな  
い混ざつたマゾ女の表情がそこにあつた。

「また数えるのを止めたな」

「……………」

「もう一度、最初からだ。残りの十三発も足して、全部で四十三発だ」

昌美は抗議も弁解もしなかつた。一見しおらしく目を伏せて、悲しそうに喘いだ。

だが、もう騙されはしない。この真性マゾ女は、より苛酷な責めを求めて、わざとカ  
ウントを中断したのだ。

駆け引きで主人を操ろうなどと、思い上がりもたいがいにしる。昌美の激烈な被虐願  
望を好ましく思いながら、私は腹も立てていた。みずから蒔いた種がどういふ実を結ぶ



か、お前の骨身に教え込んでやる。

私は、いったん昌美の拘束を解いた。床に引き据えて後ろ手に縛る。高手小手に括つた手首をいっぱい引き上げて、長い髪に結わえつけた。他には、一切縄を掛けない。二つの滑車から太いロープを垂らして、別々に足首を縛った。その作業を昌美は、床に脚を投げ出して座ったまま、ぼんやりと眺めていた。いや、わくわくしながら見つめていたのかもしれない。

「どうせ、また数え間違えるに決まっている」

私はブリーフを脱いで、小さく丸めた。

「今度は俺が数えてやる。お前には、途中で泣きを入れられないようにしてやろう」  
ブリーフを突き付けると、昌美は逆らわずに口を開いた。ブリーフを押し込んで、その上からガムテープでふさいでやった。

「ふぐう……」

悲鳴すらあげられなくなったのをみずからたしかめるように、昌美は呻いた。

「今度こそ容赦しないからな」

これまでは手加減していたと認めてしまった。私は内心で苦笑しながら、滑車に通し

たロープを引つ張った。大きく裂かれた両脚が宙に上がり、腰が床から離れる。

股間が目の高さに来るまで昌美を引き上げて、ロープを固定した。

今度はアイマスクを着けさせない。鞭を拾って正面に立ち、スタンスを決めて右手をぐつと後ろに引く私の一挙一動が、逆さ吊りにされた昌美の瞳に映じている。

ゆっくりと右手を振りかぶり、左手で鞭の先端を握ってピンと張る。

ブウンン！

鞭は空気を引き裂いて宙を飛び、真上から昌美の股間に炸裂した。

「んぐうーっ！」

昌美の背中が大きく反り返った。

「ひとーっ」

私はまた鞭を構えると、前後に揺れているY字の中心を狙って振り下ろした。しなやかな皮革が柔肌に弾ける重たい音に昌美の噴きこぼす苦悶の呻きが重なって、サデイストの妙なる調べを奏でる。

「ふたーっ……みっつ、よっつ、いつつ、むっつ」

小さなスイングでジャブを浴びせておいて。

「ななっ！」

渾身の力でとどめの一撃を打ち据える。昌美は長い呻き声を残して悶絶した。

ロープを緩めて、弛緩した昌美の身体を床に横たえる。スポーツバッグからスプレー消炎剤取り出して、それを鼻の頭にちよつと吹き付けてやると、昌美は苦しそうに咳込みながら意識を取り戻した。

「天国に昇ったように、いい気分だろ。それとも、地獄の底かな」

再び昌美を逆さ吊りに引き上げる。

「かわいそうに。こんなにひどく腫れ上がって、血も滲んでいる」

優しい言葉は、紛れもなく私の本心だった。だが、昌美をいとしく思えば思うほど、加虐の欲望が膨れ上がってくる。

「傷が悪化したら大変だ。薬を塗っておこうね」

言いながら私はがスプレー消炎剤を股間に近づけて、ノズルボタンを押した。

「ぐふーっ！」

昌美の腰が、びくんびくんと跳ねた。反射的に脚を閉じようとして太腿の筋肉が硬直するが、ロープで左右に引っ張られては無駄なあがきだった。

スプレー消炎剤を粘膜へ噴霧してはいけなないと、説明書に明記されている。噴霧するとうなるかというところ——最初のうちは冷たくて気持ちいいのだが、そのうち全体がジンジンと火照ってきて、激烈な熱さと痛みに襲われる。水で洗い落とさないと、その効果は二時間以上もつづいて、表層は壊死するのだろう。翌日になると、日焼けした肌のように薄皮が剥がれてくる。火傷みたいに爛れる部分もある。これは、私自身のペニスで体験したことだ。ただし、鞭打ちで腫れ上がってはいなかったし、傷もなかった。

刺激の強い薬品が傷口に染み込めば、塩を擦り込まれるよりはるかに痛い。昌美は逆さ吊りの身体をよじりながら、絶え間なく呻き、両眼からぼろぼろ涙をこぼしている。もはや、苦痛は苦痛にしか過ぎず、被虐の悦びなどカケラも残っていない。それでもマゾヒストの性<sup>さが</sup>ゆえに——明日には、今日の言語に絶する責めを甘く思い返すことになるのだ。

昌美の肉体に、より辛く甘美な思い出を刻み込んでやるべく、私は鞭を振り上げる。

バシイン！

乳房がひしゃげて弾ける。昌美が呻きを撒き散らしながら宙に踊る。

軽い連打と力まかせの一撃を繰り返して、乳房と腹に十五発。昌美の後ろにまわって、尻には手加減なし。太腿や脇腹への不意打ちを交えて二十発。昌美の全身は血の混じった汗に濡れそぼち、顔は涙と鼻水でぐしょぐしょになっている。私も、さすがに息が上がつてきた。

最後の一発は、背後からY字の中心に打ち下ろす。昌美は声もなくのけぞり、そのまま意識を失った。

赤青紫にまがまがしく彩られたボロクズのような肉体をカメラに収めてから、私は昌美を床に下ろした。手首を縛った縄をほどき、口からブリーフを引っ張り出してやる。濡れたタオルで股間を拭るように拭いても、昌美はぴくりとも動かなかつた。

ひと休みして呼吸を整えてから、つぎの責めを準備する。

X字形の磔台を床に横たえて昌美を乗せ、手首と足首を磔台の四隅に備え付けの革手錠につないだ。首、腕、胸乳の下、腰、太腿、膝——全身を革バンドで固定する。再びアイマスクを装着させておいて、アナルにツインローターを二つとも押し込み、入り口近くにコードの着いた小さな金属球を埋める。前の穴には、より強力な大形のバイブを挿入する。クリトリスを剥き出しにして、これもコードを半田付けしてあるクリップで

つまむ。クリップのバネは、ごく弱くしてある。今度の責めは、苦痛を与えるのが目的ではない。バイブや電極のコードを絡ませないように注意しながら、股間をガムテープで覆う。低周波治療器を二つ、バッグから取り出す。付属の幅広パッドを双つの乳房に貼り付け、一方の低周波治療器につなぐ。もうひとつの低周波治療器には、アヌスとクリトリスから伸びたコードを接続する。これで準備完了。昌美が自然に息を吹き返すのを待った。

(急ぎ過ぎている)

先週、昌美と別れた後にしたのと同じ反省が頭をかすめた。状況に応じてメニューを考えようとして、今日はさまざまな小道具を持参している。その中で最も過激な責めをつづけざまに加えようとしているのだ。

(毎度毎度、手を変え品を変えといかなくても……かまいはしない)

一度や二度で馴れてしまうほど、この責めは生易しくない。あるいは、この先もずっと、これが究極の拷問ということになるかもしれない。小出しにして馴致しようなどと考えず、限界ぎりぎりの責めを加えてやるのが、昌美に対する最大の誠意ともいえるのではないだろうか。そんなふうにも考えてみる。

「う……んん」

昌美が目を覚ました。私の裡の凶悪なサディストも目覚めて、分別めいた迷いは意識の奥へ押しやられる。

「厳しいお仕置きによく耐えたな」

昌美は頭をゆっくり左右に振り、蜘蛛の巣に絡め取られた瀕死の蝶のように弱々しく手足を動かそうとしている。まだ、夢うつつの中にいるのだろう。アイマスクで視界を遮断されていることも、全身を磔台に拘束されていることも、はっきりとは認識できていないようだ。

「今度は、飛び切りのご褒美をあげよう」

私は大形バイブとツインローターのリモコンボックスを両手に握って、ゆっくりとスイッチを押し込んだ。

ヴヴヴヴ……

大形バイブが昌美の体内で身震いを始める。

カチャカチャカチャ

狭い肉の管の中で、二つのローターがぶつかり合う。

「あ……あん……ん」

昌美が喘ぎ始めた。指のあいだから擦り抜けていく快楽を逃がすまいとしてか、両手が空をつかむ。

「あう……うんっんっ」

スイッチを最強の位置まで押し込むと、昌美は狂ったように頭を振りながら、幅広の革バンドにがちり拘束された腰を揺すり立てた。

「まだまだ序の口だぞ。本番は、これからだ」

私は、乳房につないだ低周波治療器のスイッチを右一杯まで回した。

「あぐっ！」

双つの半球が、不意に生命を吹き込まれたかのように、びくんびくと跳ねた。

「あぐっ、あんっ、ああん……」

電撃のショックが、強烈な快感に変わっていく。

「どうだ。気に入ったかな？」

「あうっ……は、はい……ぐっ……ありがとうございます」

昌美は苦痛と快感に翻弄されながら答えた。だが、返事ができるうちは本物ではない。



「それじゃ、もつともつと気持ち良くしてやるぞ」

私は、最後に残ったスイッチに手をかけた。クリトリスとアヌスを低周波刺激が襲う。

「うあああつ……あつあつあつ……!!」

赤ん坊の泣き声にも似た叫びが、昌美の喉から迸った。

「あがつ……はがつ……あつあつ……!!」

低周波の刺激リズムに合わせて、革手錠を引き千切らんばかりに昌美の四肢が痙攣する。

「や、やめ……もう、もう……あうつうつ……ああーっ!」

昌美は全身の筋肉を硬直させて、ひととき大きな悲鳴をあげた。硬直はすぐに解けたが、股間だけは別の生き物のように痙攣をつづけている。絶頂に達したのだ。

しかし、優雅に絶頂の余韻にたゆたっている暇は、昌美にはない。電池が切れるまで快樂を強制されつづけるのだ。

「あ……あうつ……すこし、うんつ……や、休ませて……」

スイッチを入れてから五分と経っていないのに、昌美は息も絶え絶えに赦しを乞い始めた。だが、アルカリ乾電池のパワーは、まだまだ残っている。

「そのまま、いつまでも休んでいいんだよ。俺はシャワーでも浴びてくる」

リズムカルに呻きつづける昌美を放置して、私はバスルームへ向かった。

汗を流しながら、二度目の絶頂を迎えた昌美の叫びを聞き、ビールで喉をうるおしながら、断末魔にも似た三度目の痙攣を鑑賞した。もはや私の存在など忘れ果て、ひたすら快樂に追い立てられて痙攣を繰り返し、果てた後には苦痛に呻吟する昌美の姿態は、いつまで眺めていても飽きなかった。脂汗にまみれた全身を妖しくくねらせる様は、ビデオカメラを用意してこなかった迂闊さを呪いたくなるほどだった。

四十分ほどで昌美は快樂の大波にさらわれたまま、再び意識を失った。電池が消耗してバイブの唸りが小さくなっていく。だが低周波治療器のほうは、まだまだ残っている。意識を失った肉体の筋肉だけが、ぴくんぴくんと痙攣をつづけていた。

私はすべてのスイッチを切り、責め具を外して、拘束もほどいてやった。優しく抱きかかえてベッドまで運び、最後は乱暴に放り投げる。

「いつまで寝ている。さっさと起きろ」

頬をはたくと、昌美はゆっくりと目を開けた。虚ろな視線を宙に向けて、満ち足りた

ようにほほ笑む。

(まったく……たいした真性マゾ女だ)

私としては、苦笑するしかない。だが、私も満足だった。サディスティックな欲望を思う存分に開放できたという悦びもあるが、それ以上に——この女を満足させてやったという、男としての充足感があった。

だが、これで今日の責めが終わったわけではない。このままでは、昌美を甘やかしたままになる。理屈抜きに、そう感じている。

「目が覚めたらベッドから降りて、マゾ牝奴隷らしく振る舞え」

昌美はもの憂げに身を起こすと、床に降りた。膝を揃えて座ると両手を着いて深々と頭を下げた。

「たくさんマゾ美を舐けてくださって、ありがとうございます」

昌美は頭を上げると、私の股間に視線を向けながら尻を浮かせて、立てた踵の上に乗せた。両脚を直角に開き、背筋を伸ばして両手を頭の後ろで組んだ。教えた通りの座り方だった。

思わず抱き締めたくなる愛しさと、さらに苛酷に嬲り抜いてやりたい欲望とが、矛盾

することなく私の心を衝き動かす。

「命令違反と不服従、水族館での失態への懲罰は鞭打ちで終わった。懲罰に耐え抜いた褒美に、地獄の底を覗くような快感も与えてやった。今度は、俺が愉しませてもらうぞ」  
まだまだ責めがつづくと知って、昌美の表情に純粋な怯えの色が浮かんだ。被虐願望を十二分に満たし、快樂の余韻とそれを上回る鞭痕の疼きにさいなまれている今の昌美は、新たな責めを求めてはいない。精も根も尽き果てた肉体をさらに責められることに、死の恐怖さえ感じているかもしれない。しかし昌美は、私の宣告に逆らわなかった。

「……はい。旦那様のお好きなようになさってください」  
「もちろんだとも」

胸に湧き上がってくる感慨を押しやっつて、私は縄を手にとった。

身体を横に倒して背中を反らさせ、手首と脚を重ねて左右別々に縛った。そのまま仰向けにすればブリッジの姿勢になる。両端に革手錠のついた金属パイプで膝を開かせて、しばし眺めを愉しむ。無毛の股間は赤黒いミミズ腫れと青紫の痣に埋め尽くされ、淡い茶色の襞にまで血がにじんでいた。

さすがに憐憫の情を禁じ得ないところだが——より無慈悲な責めを加えるべく、私は

立ち上がった。洗面器に消毒液を入れて水で薄める。そして、バッグから小さな箱を取り出した。昌美の目の前で蓋を開けて、中の品を消毒液に浸けた。

「鞭とは、またひと味違う痛さだぞ」

私は消毒液の中から太い待ち針を取り上げ、昌美にじゅうぶんに見せつけておいてから、ゆっくりと胸に近づける。昌美は顎を引いて、宙を滑っていく待ち針を凝視していた。

待ち針の鋭い先端が乳首に触れた。私は片方の手で乳首を摘みながら、待ち針をぐつと押した。

「ひいひいっ！」

耳元で甲高い悲鳴が炸裂して、耳がキインと鳴った。もう一本を十字形に貫いてから、反対側の乳首に移る。

「ううっ……」

早くも針責めに馴れたらしく、昌美は悲鳴を上げなくなった。

針を刺されるのは、鞭打たれるよりもはるかに恐怖感がある。だが、実のところ痛みはそんなに強くない。ペニスを針で責められた経験から言うと、刺される瞬間には脳天

を突き抜けるような鋭い痛みが炸裂するが、あとは鈍い疼きが残るくらいのもものだ。もつとも、これは虐められる心構えのできているマゾヒストにだけ言えることだろうし、苦痛を快感にすり替えることも可能な部分を責められた場合だけかもしれない。誤って針を爪の肉に刺したりすれば、殴られるよりずっと痛い。実務的な(?)拷問に遭えば、とうてい耐え切れずに、犯してもいない殺人だろうがスパイ行為だろうが、求められるままに自白してしまおうと思う。

そういう苦痛だけの責めを昌美に施すつもりは(いちおう、今のところは)ない。だが、SMとしての責めは、けっして手加減しない。だから乳首の次は、より鋭敏な部分に責めの対象になる。

私は待ち針を持って、昌美の左右に開いた脚の間に片膝をついた。

「そんな……そこは厭です。そこだけは赦してください」

昌美が弱々しく、しかし真剣に哀願した。

「そこって、どこだね？ 太腿かな？ 尻かな？ それとも、このかわいいビラビラかな？ はっきり言わないとわからないよ」

とぼけながら、言った部分を針先でつついていく。

「クリトリスだけは赦してください」

マゾ牝奴隷らしからぬ、きっぱりした口調だった。本気で厭がっている。だが、何がSMとしての責めかを決めるのは、主人である私だ。昌美は、私から与えられる苦痛の中に被虐の悦びを見出す義務がある。

「そこまで強く言うんじや仕方がない」

私は溜め息をついてみせた。

「ありがとうございます」

「不服従の罰を追加するしかない。ここに針を刺した後でね」

「いやあーっ！」

クリトリスを指の間に挟むと、昌美は金切り声をあげた。包皮をめくると、声はさらに大きくなった。腰を揺すり身体を倒そうとする。私は弓なりになった昌美の下半身を跨いで、腿で腰を締め付けた。

「いやっ、いや。やめて、やめてったら……ひぎいいーっ！」

貫かれた瞬間、昌美は弓なりの身体をガクガク痙攣させて絶叫した。私は腿に力を加えながら、乳首と同じように二本目を刺した。

「ひいいいっ！」

私は昌美から降りて顔を覗き込んだ。昌美は涙で顔をぐしよぐしよに濡らしながら、恨めしげに私を見上げた。

「思っていたよりは痛くなかっただろう？」

昌美は弱々しく首を振った。

「とても……辛かったです」

大丈夫だ。私は、そう感じた。昌美はマゾ牝奴隷の口調を取り戻していた。

「さて。つぎは不服従への罰だな」

私はバルーンカテーテルを取り出して、昌美に見せた。

「これは何かわかるかな？」

昌美は虚ろな表情で首を横に振った。

「こんなふうに、ここが膨らむだろ」

バルーンを膨らませながら、これから始まる責めの辛さを教えてやる。

「狭い穴の中でこうなると、絶対に抜けなくなる。ところが、穴の中へは中心に通っている管からいくらでも液体を送り込める——ふふ、わかったようだね」



「次から次へ……旦那様は、残酷なことばかりされるんですね」

昌美はしゃくり上げた。が、赦しは乞わなかった。さらに不服従の罰を追加されるのを恐れてだけなのか、この新たな残酷な責めにわずかでも興味を持つてのことなのか、そこまではわからない。いずれにしても、昌美は長い時間を強烈な便意に呻吟するしかないのだ。

私は嘴管を、まず前に挿入した。

(え?) といった表情になる昌美。が、たっぷり挿出を繰り返して嘴管を濡らし、あらためてアヌスに先端をあてがうと、安心した表情を見せた——と思ったのは、私の錯覚だったかもしれない。

昌美は下半身の力を抜いて、されるがままに嘴管を受け入れた。

「あ……膨らんで……もう、絶対に抜けないんですね」

ゴム球を握って空気を送り始めると、昌美は悲しそうにつぶやいた。

バルーンカテーテルの装着が終わる。私は消毒液のはいった洗面器にグリセリン原液を注ぎ足した。それを攪拌して、二百ccのシリンジに吸い込んだ。カテーテルの末端にシリンジを接続して、ゆっくり押し込む。

「冷たい……」

ぼんやりとつぶやく昌美。虚脱から醒めて、ようやく被虐願望が再燃し始めたのかも  
しれない。

空になったシリンジに充填して二度目の注入。

「苦しい。お腹が張っていきます……」

六百ccを注入し終えると、アーチのように突き出した下腹部は、妊婦のようにぽこん  
と盛り上がっていた。

私は立ち上がって身支度を始めた。

「糞をひりたいと喚く女につきあうほど悪趣味じゃないんでね。ちよつとパチンコに  
も行ってくるか。大当たりしたら三時間くらいは戻ってこないかな」

「でも……必ず帰ってきてくださるんでしよう？」

縫りつくようにたずねる昌美。

「そのつもりだが、連チャンがつづけば閉店までいるかもな。外を歩いていて交通事故  
に遭わないとも限らないし。まあ、明日の昼になれば、従業員が調べに来るさ。恥ずか  
しい姿をたつぷり見てもらうんだな。こういうことには慣れているホテルだ。男の従業

員だったら役得にありつこうとするかもしれないぞ」

さんざんに不安を煽ってやる。

「あまり暴れないほうがいいぞ。まだ針が刺さってるんだからな。倒れた拍子に深く突き刺さると、抜けなくなる」

外へ出ると、昼間はなんとなくゴーストタウンを思わせるホテル街が、闇を背景に原色の光に包まれて、生氣を取り戻していた。腕時計を見ると、もう午後七時を回っていた。一時間は放置して、それから後始末をしてアヌスを犯して。今日のうちには昌美を家へ帰してやれそうだ。腕はそれほど傷つけていないし、脚のほうは色の濃いパンストを穿かせてやれば、母親の目を誤魔化せるだろう。そんなことを考えながら、私はネオンの流れをかき分けて歩き出した。